

中年

# インドネシア 一人旅

大澤正明

今から十数年前、インドネシアに2年間住んでいた。最初の1年半は家族とともに過ごし、残りの半年間は家族が帰国しひとりで過ごした。

まだ家族がいる頃、「せっかく外国に住んでいるのだから、一人旅をしてみたい」と職場の同僚に話すと、「悪いことを考えていますね」と言われた。「いや、そうじゃなくて、たまに一人になりたいんです」と妙に言い訳がましくムキになって答えると、ケラケラと笑い「中年ひとり旅ってわけですか」と言った。

そのことで私は二つのことを理解した。一つは私がすでに間違いなく中年といわれる年代に達してしまったこと、もう一つは中年にはひとり旅が似合わないということだ。不埒なことを考えず家族を守ることに全力を傾注するのが中年男の務め。だから、青春の気分でひとり旅をしようとした我が身を恥じ、家族がいる間はそれっきりひとり旅はやめたのだが、家族が帰ってからはそんなことは言っていられない。青年風であろうと中年風であろうと、残された生涯でたった一度しかない自分自身の感性に気ままに従うことが許されるこの半年間。ひとり旅に出ずしてすむものかと思った。

結局、私は半年間で3か所、刺激的なひとり旅をすることができたのだが、あれから十数年、その間インドネシアの経済力は大きく向上したし、スマトラ島では大きな地震が起こり、おそらく私が1996年の新年を迎えたホテルも無傷では済まなかっただろうし、平和に見えたアンボン島もキリスト教徒・イスラム教徒の間で宗教紛争が起こっている。胸が痛むことも多いのだが、私自身<異文化>を感じることもできた初めての機会だったので、ここに書き残すことにする。

(本稿は平成8年3月に記述したものです)

## チレボンの旅

西ジャワ州東端のジャワ海に面した人口25万5千人の港町。16世紀にイスラム王国（チレボン王国）が建てられたが、東のマタラム王国、西のバンテン王国との紛争に苦しんだあげく17世紀にはオランダの保護領となる。ジャカルタに出稼ぎにくるベチャ乗りはこの近辺の出身者が多いという。チレボンの北方50 kmにあるインドラマユは早婚の習慣があることで有名。15才位で早くも結婚し、また離婚も多い。ジャカルタの夜の世界で働く女性は彼ら早婚・離婚経験者が多いという。未だ人口増加率が高いインドネシアであるが、チレボン市の年間人口増加率はわずか0.5%（1990～1998）と予測されている。こう眺めてみると、歴史はあるが輝かしいものではなく、現在は過疎に悩む中都市という輪郭がおぼろげに浮かんでくる。



### チレボン

チレボンという街自体には何の興味もなかった。地図を開くと<Historic Remains>とあるが、高校時代1度世界史で赤点を取った前科がある私としては、歴史遺跡は興味の対象外だった。

汽車に乗りたかった。特に特急列車。日本だったら新幹線か地方の特急列車。ノロノロ走る鈍行列車は、まだ現役真っ盛りの中年おじさんの趣味ではない。がんがんスピードを上げて走る車窓をトロトロした気分で眺めるのが何となく好きだった。

この国で（比較的）安全に利用できる汽車はバンドン行きとチレボンを経由して東の方へ向かう便だけ。バンドンへはすでに何度か行っている。ならば、まずは<ひとり旅>練習編はチレボンへの汽車の旅。

チレボンへの1泊2日の旅で、私は出口のない貧しさにふれた。貧しさというのはいやなものだと思った。楽しい出会いもなかったし、田舎ののんびりした風景に心を動かされることもなかった。しかし、汽車の旅特有の<心騒ぐまどろみ>といったような気分は十分に味わえたと思う。

## 1. エグゼクティブクラス

チレボンまで3時間の旅。私はそれを1時間ずつ3つに分けることにした。まず最初の1時間は本を読む。それも眠気を誘う難しめのやつ。とろとろと寝込んだところで2時間経過。ふと目覚め車窓に目をやると、椰子のまにまに藁葺きの屋根。側の池では子供達が裸で水浴、ひょっとしたら若い女性も混じっているかもしれない。

「ここはどこだろう」

寝起きの朦朧とした頭で記憶を辿る。おお、そうだ、ここはインドネシア。もうすぐチレボンというなんだかよく分からない中都市に着くはずだ。それにしても、中都市というのに、この不思議なくのどかさ>はいったいどうしたことだ、とあれやこれや考えているうちにいつの間にかチレボンに。

組織社会で生きるバリバリの中年男としては、ひとり旅といえどもスケジュールを作らずにはいられない。

◇

さて、予定どおりチレボン行き特急列車のエグゼクティブクラス。ちょっと汚れてはいるものの、一応はリクライニングシート。ひとわたり周りの様子を探ってから、おもむろに本を開く。

<ドストエフスキーの黙示録>

この数年間、常に読むべき本の筆頭にランクしておきながら、未だに最初の数行だけしか目を通していない。

2ページまで読むという、たぶん快挙というていいと思うのだけれど、その時フト気がついた。

<寒い>

クーラーがガンガン効いている。それに、どうやら本当に禁煙車のようだ。<本当に>というのは、この国、日本に負けずに禁煙の表示が好きなのに、守られているためしがない。しかし、この車内に限っては何故か誰も吸っていな

い。とすると<3時間の禁煙?>もう本など読んでいない気にはなれない。落ち着きなくあたりを見回すと、なんだか異様な雰囲気。静かなのだ。普段のインドネシア人ときたら、寄るとぺちやくちや、遠慮のない歓声、ばか笑い。<その大口、なんとかならないのか>と注意したら、<ティダ・アパ・アパ(どってことないよ)、楽しくなくっちゃ>などという。

それに比べて、この静けさ。週刊誌に目を通していてもいれば、寝入るでもなくジーと目を閉じている人もいる。たまに聞こえる声といえば、子供が通路を走る足音と、それを追いかける色の黒い見るからに中央ジャワ出身と思われるベビーシッターの慌て声。素知らぬ顔で、週刊誌に目を落とし続ける奥様、つまり母親。

このエグゼクティブクラス、たかだか2万5千ルピア(約1200円)<sup>1</sup>とはいえ、1ランク下のビジネスクラスの2倍半。とても庶民が気楽に利用できるクラスではない。

なるほどこれが上流社会かと思うと、クーラーの効き過ぎも、禁煙の表示も、後ろに気兼ねすることなくドーンとばかりに倒されたリクライニング・シートもなにやらむなしく感じられタバコ片手に隣の食堂車に移動することにした。

◇

食堂車にはクーラーがない。いや、これを食堂車といっているものかどうかわからない。テーブルが4つ並んではいるものの、脚の固定が不安定なものや、椅子が壊れているもの。テーブルの上はこぼれたコーヒーが乾き変色して斑になっている。おまけに4席のうち2席は従業員の伝表整理やおしゃべりのために占領されている。

残った2席も髭面のおじさんかお兄さんか(髭面のうえに日に焼けているから年齢が分かりにくいのだ)が席を陣取り、おしゃべりに夢中だ。おそらくビジネスクラスの客だろう。

<sup>1</sup> この時期のレートは、約1円20ルピアだった。

<さてどうしたものか>

一瞬躊躇していたら、髭面のおじさん／おにいさんと目が合った。ニコッと顔面総崩れにして笑顔を作り、<どうぞ>と手で向かい側の空いている席を指し示す。私も、かなり大げさな愛想笑いを作り、そこに腰を下ろす。



食堂車

タバコに火をつける。

<さて、どうしたものか>

相手は今かいまかと話しかける機会をうかがっているはずだ。

日本人同士なら、こういう場合、時候の挨拶から始まるのだろうが、インドネシア語片言の外人の気安さ、目を合わせて<こんにちわ>と言えればいい。あとは、お喋り好きの国民性、こちらが話題を考える間もなく話し続けてくれるはずだ。

まず<どこから来たのか>というのが、おきまりのパターン。私の場合でいえば、もちろん<日本人?>と言われることが多いのだが、たまに<韓国人?>というものもある。

「おお、日本人か。日本の技術は素晴らしい」

彼は、韓国企業に勤めているのだという。28才、独身、休日を利用して両親に会いにチレボンに帰るところ。婚約者もチレボンに住んでいる。

後は、おきまりのコース。<いつから住んでる?><いつ帰る?><家族は?><子供は何人?><仕事は?>

トロトロと、トロトロと、ちょっと退屈な会話になってくる。

座席に戻ると、食事や飲み物の注文を取りに来る。赤い制服を着たちょっと可愛いお嬢さん。ナシ・ゴレン（焼きめし）を注文する。エグゼクティブクラスは至れり尽くせりだ。出発して間もなく、サービスのアクア（飲料水）が配られるし、希望者にはクッションのサービスもある。下車間近になると消毒液ぷんぷんの紙おしぼりも配られる。もちろんクーラーは相変わらずガンガン効いているし、車両最前方にはテレビも設置されている。過去2回利用したバンドン行き特急はいずれもテレビは故障中だったが今回はちゃんとビデオを放映している。堂々の3割バターではある。

◇

ジャカルタ市内で1駅だけ乗車のための停車をした以外はチレボンまでノンストップで走りぬける。スピードは決して日本の在来線特急に負けない。速ければ速いほど不安も増すというのは、この国のメンテナンスのいい加減さを知ればこそ。

チレボン駅に到着すると、ホームは人でごった返している。数百人の乗客1カ所の出口に殺到する。迎えの人と抱擁する人々、たかだか3時間の旅とは思えない大げさな光景があちこちで繰り広げられる。

懐中に気を配りながらやっと出口に辿り着くと、ベチャやタクシーの運転手が大勢客引きしていた。外国人は決して彼らの車に乗ってはいけないというのは、食堂車で受けたアドバイス。

帰りのチケットをあらかじめ買っておこうと長い列に並んでいると、突然中年の女性の怒鳴り声が聞こえた。少年の腕を固く掴み何やら激しく罵っている。少年が腕を振り払うと、中年女性は少年の頬をバシッと強く打った。少年はふてくされたように雑踏に消えた。おそらく盗みを働こうとしたのだろう。それにしてもこの国の女性は気性が激しい。

駅前の通りは意外にきれいに整備されている。歩道もある。街の見目の清潔感は歩道の

あるなしで大きく左右される。歩道がない道路は、舗装の切れ目あたりが必ずとっていいほどごみで埋まっている。

しばらく歩くと、全身裸の男に出くわした。髪はぼさぼさに伸び固まっている。避ける間がなかったので、まともに見てしまった。保護する施設が不足しているのだろう、よくこの種の人を見かけるが、まともに対したのは初めてだった。気持ちのいいものではない。〈ギラッ〉というのだそう。日本の場合は側頭部を人差し指でグルグル回すが、こちらは額に人差し指を斜めに当てる。

1時間ほど街を歩いてホテルを決める。上の中といったところか。

## 2、ベチャに乗る

ホテルの玄関を出ると、ベチャ乗りが一斉に声をかける。こういう時は人相で選ぶしかない。一番やさしそうで体が貧弱な者と交渉することにした。

1時間で1万ルピア。多すぎたなと思った。5千から1万の間、せいぜい1時間7千ルピアといったところが相場だろう。交渉事は苦手だ。エイ面倒だとばかりに、決してめめ事にならない金額を提示してしまう。このことが相場をつりあげるだけならさしたる罪はないだろうが、結局彼らを一攫千金を夢見る山師にするだけなのだ。

「どこに行きたい、トワン」

「まかせるよ」

王宮に行くという。途中車を止めて幌を下ろした。この方がよく見えるだろうという。よく見えるということは、よく見られることでもある。この町はあまり外人が多くないのかもしれない。珍しそうに振り返る人が多い。

ジャカルタ周辺と違って、ここはまだベチャがハバを効かしている。ジャカルタ周辺でベチャに乗ると命がけだ。乗用車がまるでからかうかのようにすれすれを猛スピードで走り抜け

るのが常だが、ここではそういうことはない。

街中を抜けてかなり長い距離を走った。疲れた様子はない。気持ちよさそうに、あたりを解説しながら走っている。聞き慣れない名詞が多くて私にはさっぱりわからない。

最初に訪れた王宮は、観光地図に載っていた〈Historical remains〉なのだろうが、私には退屈だった。

入場料として千ルピア払うと、頼みもしないのにガイドがついた。初老の品のいい男だった。きれいな英語だった。

「わたし、日本語少しだけ」

「立派、立派。いつ覚えたの」よけいなことを言ってしまった。

「あなた達の時代に」

「それは、それは」と村山前首相張りの遺憾の意を表すると、

「No problem , 昔のことさ」と言った。

一通り見終わった時、「お礼をしたいのだが」と切り出した。あまりに品のいい人だったから、チップを渡すのが失礼かもしれないと思ったのだ。

「あなたは、私に支払う義務はない。しかし、あなたが払うというのなら喜んでいただこう」と言った。

なるほど、品のいい人は言うことが違う。



ベチャ



生身の人間が懸命に自分の後ろで漕いでいるという心の痛みがなければ、ベチャという乗り物は実に快適である。おまけにこの漕ぎ手、

あまり悲壮感を感じさせない。よく喋る。

現在、32才、ベチャ乗りを始めて6年目。子供、なんと6人。上が12才、下が2才。

「じゃあ、しっかり稼がないといけない」

「そのとおりなんだ、トワン。ジャカルタはベチャがあるのかい」

「ない。乗り入れ禁止だ」

「チレボンも大通りはだめになった。たぶん、ここも全面禁止になる。どうやって食っていけばいいものやら」

◇

次に行ったのは王の瞑想所だという。ゴツゴツした岩場で子供たちが大勢遊んでいる。ガイドがいるかと聞かれたが断った。<昔々、王様がここで……>などという話を聞いても興味がない。

しかし、一歩足を踏み入れた途端、気持ちが変わった。子供が多すぎる。それに年齢層が高い。中学生くらいの子もかなりいる。危険を感じたのだ。彼らが一斉に私にーというより私の財布に注目したら、ちょっと困ることになると思った。

ガイドならぬガード氏の英語はすこぶる分かりにくかった。彼自身もあまり得意でないのか、こちらがインドネシア語で応じると次第に英語・インドネシア語のチャンポンになり、やがてインドネシア語だけになった。

瞑想所といっても、さして大きくもない岩場に迷路を作ったような感じで、私は子供の頃雪で作ったお城を思い出した。現在、子供の遊び場になっているのもっともで、子供たちには楽しい遊び場だろうが、大のおとながこんなもので楽しんでいちゃいけないのじゃないの、といたくなるような代物だった。

◇

ベチャは結局3時間拘束したので、3万ルピア支払った。これはいかにも多すぎる。おそらく彼の平均日収の1週間分くらいになるだろう。

「明日は、12時半発の列車だから、9時から12時までの3時間で2万ルピアでどうだ」と

いうと、嬉しそうに頷いた。

### 3、ディスコという名の

刺激のない旅だと思った。エグゼクティブクラスの旅とはこんなものか。ベチャにしても乗り心地満点、快適ではあるが、中年ひとり旅、快適だけではつまらない。たまに、不意打ちを食らうような刺激が欲しい。

ホテルの2階、私の部屋のすぐ近くにディスコがある。どうもそれが気にかかる。別にディスコで踊るのが好きなわけではない。むしろ、それは私の趣味から最も遠いところにあるといってもいい。

この国のディスコには特別なわけがあるという。新聞にディスコで売春が摘発されたという記事が載ることがある。<へー？>という感じなのである。イスラムの国で売春が行われているというのがまず私の常識あるいは偏見からは信じられないし、ディスコでどういう売春が行われるのか。日本でたった一度だけ若い人たちに連れられて行ったディスコを思い浮かべても、やはり<？. ？. ？>なのである。

行ってみたいが、こわい。誰か一緒に行ってくれる人はいないものか。すこぶる頼りないレポーターなのである。

いた、いた。食堂で見かけた宿泊客がディスコの前の椅子に座ってお喋りしている。まずは彼らと仲良くなり、一緒に入ってみることにしよう。

作戦が決まればあとは簡単である。ひとしきり、おきまりのお喋りをした後、

「ここは、ディスコなのか」

「そうだ、ディスコだ」

「それにしても音楽が聞こえない」

「いや、やっているはずだ」

「私は踊れないが、見るだけでもいいのか」

「もちろん」

「じゃあ、一緒に行ってみよう」私は立ち上がった。こうなったら勢いだ、2人が付いて来



ようが来まいが関係ない。

暗い。迷路のような暗い廊下を2回程曲がると、フロアがある。日本で見たのよりはやや狭いが、似たような作りだった。奥のやや高まった所でディスクジョッキーがレコードを回している。フロアの手前側にテーブルと椅子が数セット置いてあり、そこに案内された。プラスチックの粗末な椅子だ。

時を移さず、女性が隣に座る。21才だという。

ママさんらしき年頃の女性がやってきてオーダーをとる。ビールを注文する。

「席は、どうします？」

「どういう意味だ」

「2階もあります」

「2階はどうなっているの」隣に座った女性に聞く。

「もっと暗い」

「ここだって充分暗いじゃないか」いいよ、ここでいい、とママさんに告げる。

フロアでは誰も踊っていない。私の斜め後ろには女性が十人ほど座っている。客を待っているのだろう。

「お客さん、名前は？」

ひどく訛った英語だった。外人だから、英語のできる女性が選ばれたのだろう。

足を組んで、タバコに火をつける。彼女の方が。とても21才には見えない。腿がたるんでいる。

「来てくれて、嬉しい。せっかく来たんだから、2階にいこうよ。2階はもっといいよ」

「もっと、おそろしいのじゃないか」

キョトンとしていた。

通路を挟んだ隣に男が座った。さっきの宿泊客だろう。もうひとりはどうしたのだろう。やがて、フロアにライトがともり、レコードの音量が高くなった。後ろに座っていた女たちが、面倒くさそうな物腰でフロアに出、2人1組になって踊りだした。

客がいない。2階に先客がいるのかもしれないが、少なくとも見渡せる範囲内では私だけだ。

とすると、彼らは私に見せるために、ああしてチンタラ踊っているわけだ。この分では客はもう来ないだろう。今日の彼らの仕事はああして踊るだけ。いくらになるのだろうか。せいぜい3・4千ルピアといったところだろう。

隣の女は、嫌われているのが分かったのか、口数が少なくなった。たぶん彼女は今日は少し実入りがいいに違いない。

ディスクジョッキーがレコードの回転を速めたり逆回転させたり、今、この店で、わずかに生きているのは彼だけだ。

刺激なんていうものは無理してつくるものではないなと思った。

勘定をとると、後から来た男の分も含めて、わずか2万ルピアだった。これでは女の实入りはたかが知れている。気の毒なことをしたと思った。

#### 4、墓場の風景

9時にホテルの玄関を出ると、右手を上げて、左手でベチャの向きを変えろというせわしない仕草で迎えてくれた。

「8時から待ってたんだ。トワン」

「9時からと言っといたじゃないか」

「そうだったかな。ティダ・アパ・アパ」何が<ティダ・アパ・アパ>か分からないまま、ベチャはかかって動き出す。

「どこに連れていってくれるのかな」

彼が言った地名は何がなんだかさっぱり分からなかった。スペルを紙に書いてみたけれど、やはり分からなかった。

「ティダ・アパ・アパ」

今度は私が言った。

街を抜けて、どうやら北に向かっているようだった。

「日本にはベチャはあるのかい、トワン」

「ないよ」

「そりゃ、そうだよな。トヨタが街に溢れてるんだろうな」

「ジャカルタほどじゃないさ」

「日本にはマンガ（マンゴ）がなるのかい、トワン」

「ないよ」

「バナナはどうだい」

「ないよ」

「じゃあ、どんな果物がなるんだい」

一瞬言葉に詰まってしまった。リンゴやナシをインドネシア語でなんといいのか分からなかったのだ。

「全然違う種類だ」

のんきな会話を続けているうちに、広い一本道に出た。道の両側に高い木がうっそうと繁り、その合間に丈の低いバナナの木が生えている。家がポツリポツリといった感じで、しかし、切れ目なく建っている。レンガをコンクリートでコーティングしただけの作りだが、見た目は立派に見える。小さな雑貨屋さんもある。過当競争ではないかと思えるほどの数だ。

車がベチャの側をびゅんびゅん飛ばすが、意外と恐怖感はない。ジャカルタと違って、下位の車をバカにするという習慣がないのかもしれない。

◇

30分ほど揺られて脇道にそれると、飲料水やタバコ、クルップ（えびせん）を売る屋台が数十メートルも続いている。ちょっとした宿場町といってもいいようにぎやかさだ。にぎやかだが、どこかおかしい。空気が淀んでいるというのだろうか。あたり一帯、ゾクッとするような得体のしれない靈気が漂っている。

<雰囲気あるなあ>と思った。日本でもお墓やお寺を訪ねるのは嫌いではなかった。しかし、ここはもっと危険な雰囲気がある。

ベチャが止まると、どこからやってきたのだろうか、子供が一斉に寄ってきて、手を差し出す。十数人はいるだろう。いずれも物乞い特有の服の汚れ方だ。洗濯していないのだ。<しまった>と思った。車で来たのなら中に入り込みロックすればよいのだが、ベチャでは逃げ場が

ない。

ベチャの運転手はニコニコ笑いながら、<あっちへ行きなさい>というようなことを言っていたが、動ずる気配はない。そりゃそうだろうと思う。あんたには金がないだろうが、私のポケットには子供達が1年間に手にできる以上の金が入っている。金を分散して来なかったのだ。きのうの暢気な旅で油断していた。

案内の老人がやってきた。彼にすがるようにして建物の中に入る。見た感じはどこにでもあるような王宮だった。入口で寄進を求められたので、<いくらか>と老人に聞くと、<気持ちだけ>という。前2カ所と同じ要領で2千ルピアを渡す。

ここは靴を脱いで中に入らなければならない。靴番のような老人がいたが、一瞬盗まれたらどうやって帰ればいいのか不安になったが、もう後戻りはできない。靴番の老人が寄進籠のような物を持っていたが、<入り口で渡したから>とジェスチャーで示した。

異様な雰囲気だった。ここは王の墓場だったのだ。正面の本尊のような部屋の前に墓石が並んでいる。そして、墓石を囲むように通路が走っている。通路はよく掃除されている。通路の一角で若者がジャワの正装（とはいっても、上半身裸。ジャワ式の結婚式でよく見かける衣装だ）で座り込んでいる。彼の前にも寄進籠がある。目がトロンとしている。薬をやっているのだろうかと思った。上半身裸の肉体自体にはまだ張りがあるのに、体も顔も全体的に気力の抜けた表情なのだ。

本尊の前では、やはり同じ衣装の若者が横になっていた。怠惰に寝ているとしか見えないのだが、おそらく本尊の前に瞑想しているのだろう。

次の部屋に移ると、また入口でトロン青年が寄進かごを横に座っている。部屋を移る度にそんな男がいて金を要求する。

奥の一角では、中年の女が毛布を敷いた上に横座りして、やはりトロンとしていた。断食中



なのだそうだ。

その建物を出て民家の間の路地を通り抜け奥のもう一つの建物に移る。幅1メートルほどの路地には本物の物乞いが列をなしていた。いずれも老婆だった。地べたに座り込んで、顔を下に向けたまま、金をくれというジェスチャーもない。もらうことを諦めているようにも見えず、もらうことにほとんど興味を持っていないようにも見える。迫力があつた。倦怠感も一線を越えると迫力が出てくるものなのだ。

ガイドの老人が自分にも少しくれないかと言った。彼の案内は全てインドネシア語だったが、何故か全く理解できなかった。理解できなくてもこれは必要な金だと思った。

ベチャに乗り込もうとすると、ガイドの老人が駆け寄ってきて、もう一つ通りの向こうにすばらしい施設があるから、そこを案内しようと言った。ベチャの運転手もあそこはすばらしいと調子を合わせる。もう充分とは思ったが何故か断れないのだ。

小銭が底を付いていた。

「もう金がないんだ」というと、

「両替してきてやろう」と老人がいった。

1万ルピアを渡した時、とんでもない失敗をしでかしたことに気が付いた。子供たちに財布を見せてしまったのだ。

子供たちは来たときにも増して増えていた。私はポケットに手を入れたまましっかり財布を押さえていなければならなかった。

老人が戻って来るまでに長い時間がかかった。戻って来ないのではないかとも思ったが、たかだか日本円にして500円である。来なくてもいいと思った。

律儀な老人は逃げはしなかった。しかし、なんと持ってきた小銭を子供たちの前で数え始めたのだ。確認するためだろう、一枚ずつ声に出して数え、手渡してよこす。1万ルピアを5百ルピアで持ってきたので20枚。子供たちが溜息混じりにそれを見ている。溜息が次第に悲鳴に変わり、やがて<マウ、マウ(欲しい、欲

しい)>の大合唱になった。

「もう、いい」老人から金をひったくるとポケットに裸のまま入れた。

いったい何本の手が差し出されたのだろう。誰かが後ろから、金を入れたポケットに手を突っ込んできた。もとより私自身もポケットに手を入れたまま金を押さえていたのだが、その手は私の手の隙間から入り込んできたのだ。手と手が重なり合うようになった。私はその子の手を強く腿に押しつけ進入を拒んだ。痛さに耐えかねたのだろうか、悲鳴をあげて手を引いた。誰か一人にでもやろうものなら、私は有り金すべてを取り上げられたうえ、収拾のつかないパニックの中に身を置く羽目になっただろう。

「たくさん持ってるんだから、少しくらいいいじゃない」

まだ小学校低学年くらいだろう、女の子が不満そうに口を尖らせた。

◇

なんとか子供たちの輪をかき分けベチャに乗ると老人も隣に乗り込んできた。こちらの人たちは2人あるいは3人で乗るのが普通だが、決して2人分のスペースではない。わずかに体を傾けても、老人と体を密着させることになる。

いったいこの老人は何なのだろう。あれだけの騒ぎにも平然として助けるふうでもない。むしろ騒ぎを楽しんでいるようでもあるし、けしかけているようでもある。

<いい大人が子供に乞食をさせて喜んでるんじゃないよ>

本当にそう思う。しかし、腹は立たない。腹を立てる余裕がないといった方が正確だろう。

5分ほどで目的地に着いた。高台にそれらしい建物があつて、細い石畳の上り坂になっている。その坂にそって、寄進を求める老婆・若者がひしめいている。

<お前ら、働きもせずに、こんな所で金をせびるんじゃないよ>

もちろん、そんなことを口にできる雰囲気ではない。ここは、前のようなトロンとした目つ

きではない。金に目が眩んだ盗人の目だった。

「あとだ、あとだ」あまりに執拗なので、さすがの老人も声を荒立てる。

〈あとだ〉という言葉に震えがきた。

丘の中腹の館には、10人ほど、やはり若者が、所在なげにたたずんでいた。盗人の巣窟に迷い込んだような気分だった。もう限界だと思った。私は恐かった。

まだ、先に行こうと誘う老人を振り切って、戻ることにした。

盗人どもが涎をたらして待っている。振り切って進もうとすると、肩口をつかまれる。屈強な若者だ。ポケットから、中身を見ないまま札を1枚取り出しくれてやる。とにかくくれてやれば逃げ出せる。それでもだめなら、ポケットの裸銭を空に向かって放り投げてやろう。彼らが金に群がっている間に逃げればいい。

老婆は無視した。執拗に後を追いかけてくるが、力では負けないだろう。ベチャにたどり着くまでは、金はいざという時のために、大事にとっておかなければならない。

まるで野犬に取り囲まれたような気分だった。走って逃げたいのだが、下手に挑発するとパニックになりそうな気がする。刺激しない程度の早足で、足元に注意しながら（転ばないように）、ひたすら歩く。屈強な若者がいるときは、歩きながら金をわたす。金をクシャと丸めて、彼らがそれを開き金額を確かめているときには、私はもう数メートル下に進んでいるはずだ。

やっとベチャにたどり着き、ほっと息を吐いたとき、足が震えているのが分かった。ただの震え方ではなかった。ガクガクと揺れ、ベチャに掴まっていなければ立っていることもできないほどの震え方だった。

老人が、「少し足してもらえるかい」と言ったので、裸銭の残りすべてをくれてやり、彼には目もくれずベチャを走らせた。一刻も早くその場を立ち去りたかったのだ。



参道（よくは見えないが、左手奥に多くの若者がたむろしている）

◇

ベチャは来た道をゆっくり戻る。足の震えはしばらくやまなかった。

「トワン、何か飲みたいんじゃないかい」

「ああ、飲みたいね。しかし、もう少し先に進んでからだ。あんたは、まだ大丈夫かい」

「大丈夫、まだ疲れていないよ、トワン」  
屋台の周りであつむろする若者すべてが盗人に見える。

「この辺の人たちの月収はどのくらいなのだろう」

「そりゃ、いろいろだ。30万ルピアの人もいれば、10万ルピアの人もある。みんな百姓だから、金はないさ」

適当な屋台を見つけないまま街まで戻り、小さな雑貨屋でコーラを飲む。冷えていないが、おいしかった。

「トワンでよかった。インドネシア語を話せない人だと、どうしていいか分からなくなるんだ」

「そうかい」

「今度はいつチレボンに来てくれる」

「2度と来ることはないさ。もうすぐ日本に帰るのだから」

「いいなあ、日本はどんな所かねえ。行ってみたいけれど、一生無理だね。生まれ変わってもたぶん無理だろうね」

「そうだなあ、やはり日本はいい所だよなあ、

と私は思う。

彼とは駅で分かれた。約束の2万ルピアに2千ルピア足して渡すと、<足りない>という。

「きのう、約束したじゃないか。いくら欲しいのだ」

あと1万だという。言われるままに渡した。

「ありがとう、トワン」と言って、握手の手を差し出したが、私は握らないまま背を向けた。いやな街だと思った。

## 5、ビジネスクラス

ビジネスクラスの私の指定席には、すでに60才をゆうに越えているだろう女性が座っていた。真っ青なワンピースを着ていた。品のない色だった。生地もペラペラに薄く、いかにも安物といった感じだった。ランクの落ちる車両なのだということが実感できた。

そこは私の席じゃないかと言ったが、彼女は聞こえない振りを装った。通りかかった乗務員に訴えると、よくあることなのだろう、切符をよく確認もせず、彼女を追い払った。

暑い。扇風機は回っているが窓は開いていない。ボトル入りの飲料水を2個買っておいたのは正解だと思った。

まだ、発車まで間があったので席は半分も埋まっていないが、独特の臭いがした。すえたような嫌な臭いだった。ホームの売店で買ったパンをかじる。中のチョコレートがゴロンと塊になっている。常温で液状に保つ技術がないのかもしれない。

やがて、隣の席に中年の女が座った。連れの若いカップルは通路を挟んだ方の席を取った。兄弟かと思ったが、顔は似ていなかった。

相客としてはまずまずのところだろう。少なくとも、危険な人物ではなさそうだ。

物乞いが頻繁に回ってくる。金物のお椀を持って一人一人に声をかけている。エグゼクティブクラスでは見られない光景だった。交差点で信号待ちの車を相手にする物乞いは日常的に

見慣れているが、間近に手を出されるのは気持ちのいいものではない。車の中だと、軽く手を挙げれば拒否の印となりそれ以上まとわりつかれることはないが、面と向かってどういう仕草をすればいいのか分からない。

「マアフや（ごめんね）」

隣の女がそんな言葉をかけて断っていた。物乞いに金をやれないあるいはやらないから<ゴメン>という発想は日本人にはない。私が口に出して言うとしたら<ダメだ>というだけだろう。物乞いが<市民権>を得ている国ならではの発想なのかもしれない。

「子供さんですか」隣の座席のカップルを指して聞いた。男性が彼女の子供で女性の方は彼のガールフレンドだという。チレボンの親戚の家に遊びに来て、これからジャカルタに戻るところだという。母親同伴の婚前旅行というわけだ。

やがて、列車は5分遅れで発車した。発車ベルは鳴らない。時間にルーズなこの国で、5分程度の遅れは充分許容範囲だ。

動き出すと間もなく車掌が検札にやってきた。隣の女性が何か不正乗車をしているらしく、車掌と言い争った挙げ句、追加料金をとられている。それを機に、彼女との会話も中断された。目撃した方もされた方も、ばつの悪い思いをしたからだ。



再び、本に挑戦しようと思ったが、できない。暑いのだ。チレボンのスーパーで買ったタオル地のハンカチが役に立つ。周りを見ると額に汗をかいている者はほとんどいないのに、私だけがひたすら汗を拭い、水を飲み、本を開いては閉じという落ち着きのない状態なのだ。

エグゼクティブクラスは窓に光線避けのシールを張っているが、ビジネスクラスにはない。その分だけ外の景色がよく見える。

市街地らしい風景はあっという間に終わり、ひたすら田園風景が続く。しかし、家は途絶えることはない。人口密度のバラツキが大きいこ

の国で、ジャワ島は日本の3倍もの人口過密地なのだ。

沿線に並ぶ粗末な家の裏庭で、女たちが木製のベンチに腰掛けて何することもなく汽車を見ている。暇なのだ。することが何もない。中にはハッとするほど顔立ちの整った子もいる。彼らはやがて伝手を頼りジャカルタに出て、飲み屋に勤めるか春を売るのでろう。しかし、それが何だというのでろう。まったく職のない中で、天から金が降って来るのを待つよりは、あるいは、墓場の青年たちのように宗教の名を借りた乞食をするよりは、きれいな衣装を着て客に媚びを売り、時には夜を共にすることにどれだけの罪があるのでろう。少なくとも、墓場の青年たちよりは華麗で充実した人生ではないか。より華麗で充実した人生を選択することにどれだけの罪があるのでろう。

しかし、それすらも拒否された女性もいる。タベのディスコの女性、客に話相手さえしてもらえず、少しも華麗ではなくて、たぶん極端に安い値段で自分を売ることしかできない。

停車駅で飲料水やピーナッツを売る少年たち。心なしかジャカルタで見かけるよりも彼らの声はせっぱ詰まった悲壮感すら感じられる。列車のいきちがいの間のわずかな時間に彼らはその日の食い扶持を稼がなくてはならない。

貨物列車の荷物の間に身を潜め無賃乗車をする老人たち。彼らの時間をやり過ごす忍耐力は脅威的だ。景色を楽しむでもない、ジーと膝小僧に手を組んだまま、時が過ぎ目的地に貨物列車が着くのを待つ。

小さな池の中央に1メートル程の高さの囲いを設けた簡易トイレがある。池は魚の養殖所らしく、その脇で投網を仕掛けている者がいる。

田んぼで膝まで泥に浸かりながら稲を植えている老婆。老婆とはいっても年齢はまださほどっていないはずだ。この国の女性は老けるのが早い。貧しい人たちはほどそうだ。

地道な生き方という言葉がある。時にそれは美德として捉えられる。おそらく、田で働く老

婆がそれだろ。しかし、彼らは幸せなのだろうか。少ない収入で6人の子供を育てるベチャ乗りの妻は幸せなのだろうか。

これだけの貧しさの中で、タブーは存在するのだろうか。春を売るとは不道德なことなのだろうか。いやもっと言えば、私の財布を狙うスリは罪を犯していることになるのだろうか。生きるために、より多く持っている他人の金に手をつけることは悪いことなのだろうか。あるいは墓場の青年たちはどうなのか。そして、金払いのいい日本人にちょっとおねだりしたベチャの運転手はどうなのか。

◇

「景色を見るのが好きだこと」隣の女性が声をかけてきた。「さっきからズーと外ばかり見ている。」

「初めてだから」

「日本と違うの」

もちろん、違う。全然違う。

「日本はすごいって、息子が言っていました」彼女が一番上の息子は<トヨタ>に勤めていて、何度か研修で日本に行っているのだという。彼女にとって自慢の息子なのだろう、延々と息子の自慢話が続いた。

彼らはジャカルタ市内の最初の停車駅ジャティネガラで降りた。

ジャティネガラを過ぎると列車はしばらくスラム街を走る。3畳ほどのほったて小屋にスレートの屋根。不法入居の住宅街だ。その脇の地面で真っ昼間から死んだように寝ている若者。小屋の中は暑いからか、それとも不法占拠の小屋すらないのか。

あまりに貧しい。それでも人は生き続ける。不思議だと思った。

最終駅ガンビルで降り、タクシーを止めると、家まで2万ルピアを要求された。メーターを使わないつもりなのだろう。断って、ひたすらブルーバードタクシーが来るのを待った。8千ルピアで帰り着いた。

## スマトラの旅

世界で6番目、インドネシアで2番目に大きな島で、面積は日本の約1.3倍。人口約3千7百万人。人口密度は77人/km<sup>3</sup>で、ジャワ島の10分の1。島の多くは密林に覆われている。アチェ・バタック・ミナンカバウ等土着の人種の他にジャワからの移住者も多い。一部を除き圧倒的にイスラム教徒が多く、他の島と比較すると敬虔な信者が多いという。



正月はスマトラの田舎をドライブするのだとインドネシア人パートナーに告げると、「スマトラでは決して車から降りて小便をしてはいけない。さもなくば、トラにあそこを噛みきられてしまうだろう」と言った。あそこだけならまだしも、体ごと食べられたらたいへんだ。〈あなたはもう年で、おいしい肉じゃないから大丈夫とは思いますが、トラはかなり食欲なのだ〉と言う。「でも」と、彼は勇気づけるように、しかし、首を心持ち傾げて付け足した。「たぶん、私達は来年また会えるような気がする。ティダ・アパ・アパ（問題ない）。グッド・ラック」

スマトラで、私はトラに出会うことはなかったが、サルや大蛇は目にすることができた。そして、たぶん、よい新年を迎えることができた。〈貧しくたって平気さ〉ということも、少しは感じることもできたような気がする。

## 1、お守りのゆで卵

スマトラ島へ渡るフェリーの乗船を待っている時、運転手のストリスノ氏が旅行バッグの中から奇妙なゆで卵を取り出した。

それはお守りだった。

つい3週間ほど前に帰省した折に両親から持たされたもので、殻の全面になにやら細かい文字が書いてある。ジャワ島の東部に住む彼の両親にとって、スマトラ島は海外にも匹敵する異郷なのだろう。

ストリスノ氏、当年にとって40才。大のおとながゆで卵のお守りを後生大事に抱え、聞くところによると夕べはよく寝られなかったという。

<そうか、これはとんでもない旅なのだなあ>と、遅まきながら私もこの旅の無謀さに気が付いた。



実際、それはとんでもない旅だった。できたら西スマトラ州にあるブキティンギまで行ってみたいという目標はあったのだが、絶対というのではなく、だめなら途中で戻ろうよという程度のもだった。しかし、走っているうちにストリスノ氏にも私にも欲が出てきて、それ行けやれ行けで、結果としてみると6日間で300km、スマトラ島8州の内5州を走破というたいへんな旅になってしまった。

平均時速61km/時。ジャカルタを起点とする100km足らずの高速道路を別にすればすべてが一般道路。中にはでこぼこ道を平均時速5kmで1時間という時もある。ほぼ慢性的に牛や犬、山羊に道を阻まれたり、幅員4メートル程度の道を長時間駆け抜けるという時もあったにも拘わらずこの数値。

<恐かった>というのがとりあえずの感想で、<また行きたいか>と問われれば、<いや、もう結構>と両手を挙げざるを得ない。ストリスノ氏、さぞかし疲れただろうと思いきや、意外と平気で、1日休んだだけで仕事に復帰。

彼の旅の友は<リボタンD>。眠くならない、疲れない。<バグース・スカリ(最高だ)>。少なくともこの旅で、日本製品のファンを一人確保したという成果はあったのかもしれない。

## 2、12月28日(220kmのドライブ、27kmのフェリーの旅)

「ブサール・スカリ(すごく大きい)」

接岸してきたフェリーボートを見て、ストリスノ氏が目を丸くした。

「日本は小さな島が多いから、こんなフェリーもたくさんあるんだ」「うん、だいたい日本のと同じだな」したり顔で説明する。

日本のと同じはずだ、宇高連絡船の払い下げらしく、中には讃岐うどんの自動販売機がそのまま設置されていた。

<きつねうどん 310円>

いつの頃の値段だろうか。さして遠い昔のことではないだろう。使わないのなら撤去すればいいだろうに、扉が壊れ半開きになったまま、放置されていた。

脱出経路図も日本語のまま、インドネシア語のものは見あたらない。そう、危険なんて<ティダ・アパ・アパ>なのだ。(帰りのフェリーは緊急脱出用のボートが取り外されたままだった)

椅子席はそのまま使われていたが、座敷席は簡易椅子が新たに取り付けられていたり、イスラムのお祈り場に様変わりしている。

客室の窓の所々が外されている。割れたガラスを新たに入れる経済的な余裕がないのかと思ったのだが、それはたぶん間違いだ。クーラーが使われていないから窓を開け放していないと暑いのだ。

小使用のトイレも仕切が取り外され、いわゆる<見せっこ>スタイルだから、私は恥かしい。大便所を利用しようと思ったら、流されないままのドテツと残っている。



◇

出発の汽笛が鳴ると同時にストリスノ氏がまた目を剥いた。船の最上段から子供が海に飛び込んだのだ。ストリスノ氏だけではなく私も目を剥いた。

<出発そうそうに自殺騒ぎか>

そうではない。身投げした後には平然と泳ぐ自殺者はいない。立て続けに3人飛び降りた。南国はすごい、タフだ。

ストリスノ氏は車の中で少し横になりたいという。そうになると、私は車に戻るわけにはいかない。この旅はストリスノ氏の健康次第なのだから。

見かけは日本の船だが、雰囲気はすでに南国だ。無秩序なのだ。階段や通路にドテッと座り込む人の多いこと。満席なのではない。ドテッが好きなのだ。通行の邪魔になるなどと考えるはこの国で生きていけない。邪魔だと思ったら怒ればいいのだ。怒られない限り何をしても許される。南国の人はのんびりしていて人がいいとよくいわれるが、それは嘘だと思う。ちょっとしたことで喧嘩が絶えない。のんびりしているのに殺伐としているのだ。私は喧嘩に巻き込まれるのは嫌だから、何でも<ティダ・アパ・アパ>、決して日本の価値観を持ち込まない。

人と人の洪水の中を、駅弁スタイルの売り子がタバコやティッシュ・キャンディを売り歩く。客はタバコを1本単位で買い、その場で火をつけてもらい、吸い終わるとその場に捨てる。

そういえば、英文で書かれたインドネシアの案内書にこんなのがあった。

<もしあなたが嫌煙家なら、この国は避けた方がよい>

◇

レストランで昼食をとる。

カップメン 2500 ルピア、カップジュース 500 ルピア、コーヒー1000 ルピア、合計 200 円。カップメンが高い。レストランの最高級品がカップメンというのもすごい。加工食品は高いのだ。

ショルダーバックから本を取り出して読んでいると、なにやら人の視線を感じる。浮いているのだ。確かに座席に座っている人の中に本を読んでいる人はほとんどいない。寝るか、お喋りをするか、ぼんやりたたずむか。この国の人たちは、時間のつぶし方に忍耐力がある。

◇

遅い。27km を 2 時間かけてやっと着いた。

「寝れたかい」

「いや、だめだった」

ストリスノ氏はまだ興奮状態が続いているようだった。初日はランプンに泊まることにした。バカウニという奇妙な名前のその港町から 100km 足らずの州都だ。

私の泊まったホテルは 15 万ルピア、今回の旅行ではもっとも高いホテルになった。

まだ夕方の 4 時だったが、明朝の 6 時出発を確認してストリスノ氏と別れた。ストリスノ氏は、私をそこに下ろした後、自分の宿泊料に見合ったホテルを探すのだ。

<旅のメモから>

★<この町の人口はどのくらい？><700 万人位かな><そんなばかな、ジャカルタだって 900 万人だ><じゃあ、600 万人><せいぜい 60 万人位だと思うよ><でも、たくさん住んでる>

いかにも高い教育を鼻にかけたようなフロント嬢と。(後で調べたら約 70 万人だった)

★ホテルで夕食をとった後、夜の街探索に。

<カラオケ>

現地の人が出入りするカラオケは初めて。暗い。ボックス席が 10 個ほど。スタッフは男だけ 5・6 人。ビールをオーダーすると、グラスに氷を満たしたビールが。正面には大きなスクリーンがあってインドネシアポップ歌謡のカラオケを流している。ときどき変な男の声がするとって辺りを見回すと、後ろのボックス席で男性客が一人で歌っている。照明も暗いけれ

ど、人間も暗い。〈客がいないねえ〉〈淋しいよ、お客さん〉〈いつも淋しいのか〉〈いつもだ〉

10分ほどで出る。1万ルピア。

〈ゲームセンター〉

小さなホテルの2階。コンピュータゲーム機が30台ほど並んでいる。20歳代位の客が多い。中央に高い回転椅子があり若い女性の従業員が10人ほど座っている。彼らが何のためにそこにいるのか不明。顔立ちの整った子が多い。パチンコの景品所のように仕切られた一角があって、女性が2人座っている。私と目が合うとニコリ笑う。何がなんだかさっぱり分からないがそのまま出る。レポーターとしては失格。ビビってしまったのだ。

〈ダンドット・バー〉

庶民に人気のダンス音楽。腰をくねくねさせて男も女も陽気に踊る。結構面白いかもしれない。覗いてみたが、まだ時間が早いのだろう、客どころか従業員もいない。中央にダンス用のフロア、壁沿いにボックス席が数席。その店の隣はマッサージ店。警備員の説明だと、たぶん、ここは普通ではない。店の戸を開けて若い女性が出てきた。いぶかしげに私を見て、また中に入った。

★ホテルのカウンター・バー。カウンターの中には誰もいない。決して若くはない女性が1人椅子に座って水を飲んでいる。

「まだ開店していないの？」

「いや、そんなことはないわ」と言って、従業員を探してくる。ウイスキーを飲んでいると、さっきの女性がバーの横のステージに。歌手だった。知っている曲をリクエストしたが、いずれも知らなかった。新しい歌は苦手のような。

★部屋に戻ってマッサージを頼む。〈男がいいか、女がいいか？〉ええ？そんな質問ありか？〈どちらでも〉男が来た。盲目だ。力が強い。1時間ぐっすり寝てしまった。やはり健康的なのが一番だな。

### 3、12月29日 (800kmのドライブ)

〈旅のメモから〉

★立派な道路。平均80kmでも不安は感じない。犬が多い。イスラムでは犬は不浄の動物のはずなのに何故なのだろう。スト氏の意見によると、家と家の間隔が大きいから番犬用として飼っているのではないかという。そうかもしれないが、不浄の犬なのにいいのかな。

★犬だけではない。めったやたら動物がいる。山羊、猫(意外と少ない。ジャカルタと違う)、牛、水牛、ニワトリ、ヘビ(太いのが2回、いずれも既に死んでいた)、とかげ(50センチ位。大きい。逃げ足が早い。写真を撮りそこねる)、サル(これも2回、用心深い、種類が違っていた)、動物ではないが、たまに椰子の実やドリアンも。危なくて仕方がない。

★放し飼いの牛ののんびりした様子。道路でも平然、クラクションにも動じない。ああいう生活もいいだろうなあと思うが、考えてみれば、結局は食牛という運命。のんびり草をはみながら食べられるのを待つというのは、人生観としてはちょっと馴染みにくい。その点、山羊は、同じ運命ではあるが、もっと生き生きしている。歩き方に愛嬌があって、生きていることを楽しむ術を知っている。

★牛はクラクションにまったく動じない。こちらは停車して彼らが行きすぎるのを待つだけだ。犬はクラクションに反応する。ジロリとこちらを無気力そうに見て〈わかったよ〉という風に道をあける。ニワトリは聞こえないのだろうか、クラクションには反応しない。スピードを落として、やむを得ない、轢いてしまおうという時になって、慌てて逃げる。逃げ足の速いこと。羽根をバタバタさせて逃げまどう。だから、ニワトリの死骸はほとんどない。

★犬を轢くのと山羊を轢くのとどちらがいやか。犬だ。山羊は遅かれ早かれ、1・2年以内に殺される。

★ストリスノ氏は彼らを轢くのを極端に嫌う。犬や猫にはくかわいそう>、牛や山羊は車を傷めるのを嫌うのだろう。唯一ニワトリだけは、どうしてもよけないと、エイ、ヤッ、で行ってしまう。しかし、敵もさるもの、一度も轢かれることはなかった。

★運転マナーのひどさはどこも同じだ。片側1車線の対面道路を80、90kmで平気で追い越しをかける。そんな時、右のウインカーを有効に使う。追い越されようとする車が右ウインカーをあげたら<前方から車が来ているから今は追い越すな>の合図。それは一方、対面の車に対してくもっと脇に寄って走れ>の意志表示にも。

日本の場合は、左にあげてくどうぞ>の意志表示だけ。<今はダメだ>とく今どうぞ>、どちらがよりいい人間なのだろう。しばし考え込んでしまった。

★南スマトラの州都<パレンバン>からジャンビ州の州都<ジャンビ>までたぶん2時間で行けるだろうという、インドネシア人パートナーの言葉を信じたばかりに、<まだ着かない、まだ着かない>という状態が3時間も続き、結局ホテルに入ったのは9時。地図では250kmになっていたのだから、どうがんばっても2時間で着けるわけがないのだ。

★地図を2種類持って来たのだが、そのキロ数の違うこと。5キロや10キロの違いではない。数十キロ単位で違う。多い方を信じるべきだと思う。早く着くだろう期待は常に裏切られるのだ。

★ホテルにはスタンダードとデラックスがあった。デラックスで6万5千ルピア。デラックスをオーダーすると、2つ部屋を案内して<好きな方を選べ>という。トイレの便座が破損していない方を選ぶ。

★食事を頼むとくここにはない>という。<ミーゴレン(やきそば)ならできるけれど、おいしくないよ> 本当にもうまくなかった。

★ビールを頼むとくここにはない>という。<隣にパブがあるから、そこに行けばいい> ランプンで夜の街を探索して以来、この種の店に対する恐怖感はなくなったのか、気楽に扉を開けた。

◇

暗い。奥の方にボックス席があって人が何人か座っていたが、暗くて男なのか女なのか区別がつかない。

真ん中にステージがあって、それを囲むようにテーブル席がある。テーブルとはいっても、丸テーブルにプラスチックの椅子が4脚おいてあるだけだ。そのテーブル席の外側、壁に沿ってソファのボックス席がある。

客が入ってきたというのに誰も寄って来ない。こんな暗い中でポツンと1人突っ立っているのも心細いものだ。どうしたものか、半ば腰が引けた時、奥の方のカウンターの中にバーテンらしい人間がいるのが見えた。

「ビールを飲めるかい」

「どうぞ、どうぞ」 愛想がいい。

初めからその調子でやって欲しいよな、などと日本語でぶつくさ言いながら、入り口に近いテーブル席に座をしめる。

ビールはやはり氷入りだった。あのみすぼらしいデラックスルームとパサパサしたミーゴレンを知った後だけに、少しも驚かない。氷入りのビールを飲むとき、いつも悩むことがある。冷たいけれど薄まったのを飲むべきか、ぬるいけれど濃いのを飲むべきか。どうしようか、ちょっと躊躇していると、いつの間にか、どこから現れたのかもわからない、女が私の隣に座った。

丸テーブルを前にして、プラスチックの椅子に座わりながら、女性を隣にはべらせるというのも奇妙なものだなあ、と思った。

29才と言ったが、もっと老けて見えた。何となくくおばさん>くさい。所帯やつれが見えるのだ。

やたらとタバコを吸う。私も困ってしまった

からタバコを吸う。お互いに灰皿をそっちへ回したり、こっちへ回したり忙しい。

ウェートレスが彼女の注文をとりに来ると、こちらの方をチラリと伺う。

「いいよ」と答えると、アクアを注文する。飲料水だ。こういうタイプは相手の裏をかくのが好きなのだ。

聞くと、ジャカルタから来ているのだという。子供1人、夫とは死別。子供は両親の元に預けて、2週に1度帰るのだという。逆のケース、つまり田舎に子供を預けてジャカルタに働きに来るとするのはよく耳にする。

「なぜ、ジャカルタで働かないの。ジャカルタの方が稼ぎがいいのじゃないか」

「両親がこういう仕事を嫌うのよ」

<こういう仕事>とはいったいどんな仕事だろう、一瞬考えてしまった。レストラン風な丸テーブルに座って、ただタバコを吹かしているだけではないか。服装もそれらしくない、いわゆる普段着だ。

「このホテルの2階に寝泊まりさせてもらっているから生活は悪くない。両親にはレストランの皿洗いをしているって言ってるけどさ」

「ここには、あんたみたいな人がたくさんいるのか」

「そう、みんな仲間よ」奥のソファに座っている者達を顎で指した。

「彼らはここの人か」

とすると、客は私だけ？

「そう、まだ時間が早いもの」

早いとはいっても、もう10時を過ぎている。いったいこの街はどうなっているんだろう。

やがて歌手が現れた。50才は過ぎているだろう。でっぷり太って、女性ながらすごいだみ声だ。私を見かけると、<こんばんわ>と日本語で言って、私の隣の席にどっかと腰を下ろした。

「日本の歌を知ってる。後で歌うからね」インドネシア語だった。日本語は<こんばんわ>だけ、いや、たぶん<ありがとう>も。

「日本の歌は嫌いだ。インドネシアの歌にし

てくれないか」インドネシア人が歌う<昴>は聞きあきた。

「日本はどこ？」どこといっても、彼らが知っているのは<東京>と<京都>だけなのだ。案の定、<福岡>は知らなかった。

「カシワってどの辺り。東京から近いの？」

「なぜ知ってるの」

「ザーと昔の話よ、父の時代のね」

そうか、ここはスマトラ。日本軍の縁の深いところだ。

ステージに立つと貫録があった。なにやら前口上を言ったあと、たぶん<ここに日本からのお客様が>というようなことを付け足した。

「ミスターオオサワ。ようこそ」

そして、やはり<昴>だ。しかし訛のないきれいな<昴>だった。だみ声がいい味をだしていた。この国で何度も聞かされた<昴>の中では最高のデキだった。私の席までやってきて日本の歌を立て続けに歌った

「チップよ」隣の女性が耳うちする。

「いくらだ」

「1万でも2万でもあなた次第」

1万ルピアを渡した。金額をチラリと確かめて、<ありがとう>と日本語で言った。

ランプンの歌手が知らなかったインドネシアの新しい歌謡曲も楽々と歌いこなした。

「また、チップが必要なのか」

「いらないわよ。出したいのなら、私にちょうだい」

客が1人入ってきた。ボックス席の従業員が一斉に立ち上がる。ボーイもいればホステスのような女性もいる。

「ねえ」声をひそめて言う。「1人で寝るのは淋しいのじゃない？ 朝まで一緒に寝てあげよ」

「おれの部屋はフロントのすぐ隣だよ、みっともないだろう」

「平気よ。ビアサ（いつものこと）よ」

そうか、それはビアサなのか。ビアサと聞いた途端に気が滅入った。

同じ誘いが執拗に繰り返された。明日の朝早いからと言って席を立つと、

「タクシー代ちょうだいよ」なんだか焦った感じだった。

「いいよ」1万ルピア渡した。

「ちょっと質問していいかい」別れ際小声で聞いた。「ホテルに寝泊まりしているのに、どうやってタクシー使うの」

そんな冷やかしは言うべきではなかったとあとで思った。

#### 4、12月30日(600kmのドライブ)

今回の旅行の大まかな計画をパートナーに告げると、ブキティンギにはぜひ2泊すべきだと言った。そこは今回の訪問地では唯一の観光地だった。

「街全体が清潔で気持ちのいい街だ」という。

当初西スマトラ州の州都パダンとブキティンギに1泊ずつしようと思っていたのだが、彼のアドバイスに従いパダンは通りすがりに眺めるだけにした。

<旅のメモから>

★ジャンビからパダンに向かう道すがら。大きな木が根こそぎ切られ焼かれている。これが焼き畑農業なのか。ストリスノ氏の説明によると、油椰子のプランテーションを作っているのだ

という。赤い実が料理用油になるらしい。焼き畑もいまは企業化されているということか。そんな丸裸にされた山が延々と1時間も続く。

★昼食のパダン料理、<本場のパダン料理はどうか>とストリスノ氏に聞くと、<うまくない。ここはまだパダンじゃない>という。かわいくないヤツ。

★パダンに近づくとゴツゴツした岩山が続く。<こんな所にトラが住んでいるのだ>とスト氏。しかし、彼が昨日給油所で仕入れた情報によると、最近道路に出てくることはほとんどないという。安心するも半ばがっかり。

★パダンを経由する予定だったが、ストリスノ氏、道を間違える。まあ、いいや、直接ブキティンギに行こう。ドライブ疲れ、早くホテルに入りたい。

◇

観光案内書によると、ここに住むミナンカバウ人は先を読み計算のできる商業に向いた民族で、他の地域のように華僑に支配されることなく、彼ら自身が商業や流通の大勢を動かしているという。

たしかに街全体が明るい。家も立派だし、華やかな色合いなのだ。街の印象としては、日本の高原都市と似ている。しかし、街を歩いているとどうも落ち着かない。街全体がなぜか嘘っぽいのだ。日本の観光地でも見られるような、作られた裕福さ、美しさを感じる。

この馴染めなさは、一つにはイスラムのショール(ジルバブ)を被っている女性が多いということにあるのかもしれない。ジャカルタのおおらかなムスリムを見慣れた目にはかなり窮屈な気分なのだ。ちょっと近寄りたいたい感じがする。

そして、ここにはベチャがない。

「パダンにはベチャがありません」

赴任前にインドネシア語を習ったパダン出身の留学生がそう言った。「だから、ベチャの人を見るとかわいそうだと思います」

ベチャがないかわりに馬車が走っている。坂の多いブキティンギの道路を走っている馬を見ると、彼らも負けずにかわいそうだと思う。少なくともベチャ乗りは拒否することはできるが、馬はできない。

<旅のメモから>

★可愛い子が少ない。色が黒いのだ。色が白い、黒いということは、そんな大事なことなのか。この国の美人の産地は、バンドンとマナド。どちらも色が白いのだという。白いということは、外の血が入っているということなのに。

★職場の秘書に「最近色が白くなったね」というと、嬉しそうに「日本人みたいでしょ」という。「化粧が濃すぎるんじゃないの」というつもりだったのに。

★私の腕と色の比べっこをして「白いなあ」と溜息をつく人が男女を問わず多い。この国では、色が白ということ価値観の多くを占める。

★オーストラリアに旅行したとき、タクシーの運転手が白人なのでびっくりした。「乗せていただいてよろしいんでしょうか」という気分。

★肌の色によって劣等民族・優等民族というのが、これはどうあがいてみても存在するのではないか。

◇

ホテルは10万ルピアだから、1日目と2日目の中間。ホテルに限って言えば、この国の値段は正直だ。10万を越えるとドアボーイがいて、ちゃんとしたレストランがあり、売店もある。部屋の清潔度は10万を越える程度によって決まる。

フロントの女性もジルバブを被っている。別にジルバブが嫌いというわけではないのだが、街全体がそうだとすると、やはり何か落ち着かない。

部屋には小型の冷蔵庫が置いてあったが、アクアとジュースが入っているだけで、ビールはなかった。これはガチガチのムスリムの経営者だと思った。

フロント嬢のジルバブを思い浮かべながら、「カッコつけるんじゃないよ」

と思わず、異文化体験の途上にある中年探検家にあるまじき暴言を吐いてしまった。

だから、レストランでビールを出すことができないと聞いてもすでに驚かない。いや、むしろ結果としてみれば、アクアの方が好都合だった。

というのも、コーンスープ。粒コーンと人参・鳥肉・グリーンピースときざみネギを玉子とじにしたような代物だった。なにしろ、スープ

をアクアで流し込まなければ入っていかないのだ。もし、ビールで腹を膨らませた後にこのスープを口にしたら、間違いなく逆流したことだろう。まだ、半分ほどしか流し込んでいないうちに持ってきたメインディッシュにかこつけて下げてもらった。

テンダロインステーキはローカル牛。案じたほど固くはなかったが、肉に味がない。草履を毛羽立て機でむちゃくちゃに膨らませ、肉色の絵の具を流し込んだような感じだった。まずいのは許せるとしても、この肉は間違いなくお祈りされながら殺されたやつだと思うと、どうにもやりきれない。イスラム教ではお祈り済みの肉しか食べてはいけないことになっているのだが、異教徒から見ると、それは偽善としか思えないのだ。

◇

レストランではちょうど誕生パーティが始まっていた。レストランの2列分のテーブルを借り切って、50人ほどの親族が一同に会って食事している。誰かが挨拶するわけでもなく、黙々とビュッフェスタイルの食事を口に運んでいる。わずかにそれがパーティだと感じられるのはカメラのフラッシュだけだ。もし私がパーティの幹事なら、大慌てで酒を注ぎまくったことだろう。白けているように感じられるのだ。

それは、場が庭のステージに移りカラオケ大会が始まってからも同じだった。どうも盛り上がり欠けるのだ。ジルバブを被った女性がキキキ声でダンドットを歌い、それに合わせて男同士が対になって踊る。その妻たちは決して踊りには加わらず、おだやかな笑顔で見ている。アホな亭主を、女たちがあたたかく見守っているという風情。そういえば、ここは女系家族として有名な地で、男はいってみれば女王様につくす働きバチ。男たちの腰振りダンスを見ていると、男の一人としてなにやら哀愁といったものを感じてしまうのだ。

ひたすら気が滅入って、部屋に戻りビールを3本飲んだ。外で買ってきて冷やしておいたも



のだ。なぜ4本にしなかったんだろうと後悔しつつ、それでも寝に就いた。

## 5、12月31日(180kmのドライブ)

朝、パダンのホテルに電話した。

「部屋ある？」

「あります。お名前は」インドネシア語だった。

「何時ころ着きますか？」英語に変わっていた。たぶん6時頃だろうと答える。

「今、どちらにいらっしゃるのですか」

ブキティンギと答えると、

「バーイク(よろしい)」

軽やかで、それでいながら聞くことは全部聞いている。<バイク>という言い方がこういう使い方をするのだと、初めて知った。

暑い所に住んでいると、新年に対する特別な思い入れは希薄になるが、やはりどういう気分で迎えるかということは考える。この街で迎えないと思ったのだ。

朝食はトースト3枚、目玉焼き、オレンジジュース、コーヒー。両目焼きではなくて、片目焼きが2枚重ねられていたのが面白かった。両目焼きを作る倍の時間がかかるだろうに敢えてやってしまうところがスゴイと思う。

31日ということなのか、ウェイトレスが上から下までピンクのイスラム服で着飾っている。こういう格好をされると、気が晴れる。ジルバブも悪くないと思ってしまう。

今日はちょっと乗れる日かもしれないと思ってしまう。きのうはどうにかしていたのかも知れない。

とは云っても、パダンに移りたい気持ちに変わりはない。<バイク>ということを使う女性を見てみたいと思う。<バイク>を直訳すれば<よい>という意味だ。

「今、ブキティンギだ」

「よい」

今、その場所にいるのなら私が告げた時間に

充分間に合うという意味なのか、あるいは、必要なことは全部わかったという意味なのか。おまけに<バイク>と長く伸ばして言うのは失礼な言い方ではないのか。少なくとも、私は聞いていて気持ちがよかったから、そうではないのだろう。あれこれ考えていると楽しい。

<旅のメモから>

★日本軍が作った防空壕が観光の目玉の一つになっている。インドネシア人がたくさん見物している。<ちょっと恥ずかしいなあ>と声に出して言うと、近くのインドネシア人が笑った。しかし、立派なものだ。まだ若いインドネシア人ガイドが誇らしげに説明する。

インドネシアの中学校の教科書によると、これを作るために3000人のロームシャが動員され、機密保持のため、完成時には全員殺されたという。<ちょっと恥ずかしい>なんてもんではないのだ。

◇

帰ってから、パートナーから「何故、ブキティンギに2泊しなかったのか」と責められた。

「会う人にあまり親しみが感じられなかったから」と答えた。かわいい女性が少なかったとも、ジルバブに親しみを感ぜられなかったとも、ビールを飲めなかったからとも言えなかったのだ。

「あなたは、日本軍の防空壕を訪れたか。あの街は日本人に悪い印象を持っている人が多いのかもしれない」

しかし、防空壕で出会った人たちからは、私に対する敵意は感じなかった。

占領時の日本に対するまとまった取材をしたことはないが、たまに話す若い人たちの反応は決まってこうだ。

「もし、日本軍がやって来なかったら、インドネシアは未だに独立できていなかったろう。しかし、日本に原爆が落ちなかったら、インドネシアは未だに日本にいじめられていること

だろう」

そして、当時を知っている年配の人の反応はこうだ。

「ティダ・アパ・アパ。昔のことだ。今の日本人は大変友好的だし、私達は親しみを感じている」

とはいえ、若い人も年配の人も、<ロームシヤ><ビンタ>という言葉をやまい具合に会話の中に挿入するのは決して忘れない。

<旅のメモから>

★この街のインドネシア人は気持ちの上でも独立しているのだろう。今まで会ったインドネシア人は人に頼ることを気にしない人が多い。私がこの街を好きになれないということは、私自身独立した人よりも頼る人が好きだということか。それは、いけないことだ。

★マニンジョウ湖を經由してパダンに向かう。ストリスノ氏が喜ぶ。この湖は小学校で習ったことがあるという有名な湖なのだそう。

44カ所のつづら折りの坂を下りると湖畔に着く。車を止められるところを探す。通りがかりの女子高校生グループに<湖はどこだ>とストリスノ氏。ケラケラ笑って<ここだ>と彼ら。スト氏、ムツとして、次からは<湖のレクリエーション施設はどこだ>と改める。高校生と一緒に私も笑ってしまった。

★湖畔で養殖場を営んでいる夫婦は、ジャワ島からの移住者で、ストリスノ氏の故郷のすぐ近くのようだ。しばし故郷の話に花を咲かせる。

★ストリスノ氏、しきりに感心。移住者は同じ故郷同士で固まるものなのに、彼らは単独で頑張っている。偉いものだと思ふ。彼は涙腺が緩い。

★新年を前にして、高校生のグループが多い。彼らは日本の高校生と同じだ。ケラケラ、明るい。それが、大人になると、どうして陰しい目つきになるのだろう。

★湖を出ると、すごいスコール。道路が一気に川のようになる。スピードを出せない。地面が

見えないのは薄気味悪い。一度、道路のくぼみにドンと落ち込み、スト氏頭を抱える。しかし、1時間できれいに上がる。

★道中、ジルバブを被った若い女性がバケツや昆虫網を手に持ち寄進を求めている。道に傷害物を置き車が止まるようにしているのだが、前を走る車はスピードをやや落としただけで窓から500ルピア札を放りなげる。それを追いかける彼ら。危うく轢きそうになる。次の関門ではコインを落とした。草むらにコロコロ転がっていくのを昆虫網を持った女性が怒ったように見ている。やはり、これは、この国でも礼儀を欠いたことなのだろう。

★この国の人たちは、金持ちも貧しい人もお金を大事にしない。札はクシャクシャに丸めたままポケットに入れるし、スーパーでも客はお金を手渡すのではなくポイと放り投げる。あんなことをしたら、うちのオフクロ、怒るだろうなといつも思う。

★大勢の人たちが橋の袂に集まり大騒ぎ。幅4・5メートルの小さな川に丸太を掛け、少年が2人向き合って、手に持った砂袋のようなもので叩き合っている。落ちた方が負けなのだろう。2人ともむきになっている。今にも泣き出しそう。見物人(2・30人はいたろう)は大喜び。日本のテレビで見たことがある。そういえば、<風雲たけし城>がこちらでは人気があったという。その影響かもしれない。スト氏が知らないというから、伝統的なゲームではないのだろう。



インドネシア版風雲たけし城

★一面の椰子林の中で、牛や水牛がのんびり草をはむ。水牛は南国の風景に合っている。

★椰子をいっぱい積み、その脇にマントヒヒを乗せたリヤカーがバイクに引っ張られている。椰子に登って実を採らせるためのサルだという。スゴイ。

★パダンに入って、<この街で一番おいしいパダン料理屋はどこだ>と通りがかりの人に聞くと、<ここがおいしい>と隣の食堂を指さした。期待はしなかったけれど、入って食べた。<どうだった>後でスト氏に聞くと、<ビアサ(並)>と答えた。

★ホテルでチェックインをしていると、背後から声を掛けられた。<あら、ミスター・オオサワ。ブキティンギから？><電話の？><イエス> にこやか。鼻は丸っこいが、目が輝いていて、知的な感じ。

★荷を部屋に置き、街に出る。誰も私を見ない。物珍しそうな視線を感じない。変だ。デパートの大衆食堂でコーラを飲んでみるが、誰も注目しない。見られることの恍惚と不安。太宰治だったかな。見られないことの物足りなさ。

★Tシャツを買うと、<どこから？><ジャカルタから><あら、ジャカルタの言葉って少し違うのね><日本人だよ><へー、そうなの>びっくりしたようにまじまじと見た。私のインドネシア語に少し自惚れる。<ダリ (from) ジャカルタ>の一言だけだけど。

★<old & new>という新年パーティがホテルで催されるという。3万ルピア。ちょっと高いがチケットを買った。

◇

7時過ぎ、真っ赤なスーツに着替えたフロント嬢3人がロビー脇のテーブルに並んだ。パーティの受け付けが始まるのだ。<バーイク>嬢もいる。

「ミスター・オオサワもパーティに参加したら」

「もうチケット買ったよ」

「バーイク」

客は8時頃からポツポツと集まりはじめた。正装している人もいればジーンズの人もいる。年配の人、若い人、子供がけっこう多い。3万ルピアといえば大金だ。家族で来るとなると10万ルピアを越える。公務員の10日分の収入に匹敵する。何人か名刺を交換した人の肩書きを見ると、やはり会社を持っている人が多いようだ。

会場入りすると、まずビュッフェスタイルの食事を皿に取り、銘々の席で食べる。飲み物は別払いだから、たかだか2・3千ルピアのコーラを子供だけに買い与えたりという光景も其処ここで見られる。意外と会社持ちのチケットが多いのかもしれない。

やがて歌手が歌い始める。この日のメインはジャカルタで活躍しているというふれこみの女性歌手だが、まだ現れない。地元出身の歌手3人が前座を務めている。

ここでもダンドット。ダンドットは踊っている人は気持ちがいいのかもしれないが、周りを盛り上げるという効果は薄い。続いてクイズや景品の抽選とお行儀よく進行し、ディスコ大会が始まると会場は一気に盛り上がる。男も女も子供も参加する。恥ずかしがって見ているだけの人もいるが、圧倒的に参加する人が多い。

こうなると私は浮いてしまう。こんな新年を迎えたことがあるなあとと思う。24才の時だ。レニングラードのホテルでやはり新年のパーティがあって、多くの人がダンスに講じるのを半ば羨む気持ちで浮いていた。しかし、いやな孤独感ではない。

喧騒を逃れ、ロビーのソファに座っていると、「どうしたの」と<バーイク>嬢が声をかける。彼女はまだ受け付けのテーブルに向かっている。

「ちょっと疲れた」

「こちらに来ませんか」彼女の隣に座っている男性が言う。日本語だ。「一緒に話しましょう」

やれやれ、また<こんにちわ><ありがとう

><おはよう>につき合わされるのかと思いながらも席を立つ。

「私、少し日本語できます」

「ほう、じゃあ、これから日本語で話そう」  
けっこう会話についてくる。

「うまいね」というと、

「彼は、4年間大学で日本語を勉強してたんですよ」と<バーイク>嬢。

「じゃあ、これ読めるかな」私の旅行メモ帳を見せる。

「この字難しい」音をあげる。

それはそうだ、私の字は日本人でも読めない。彼は、その代わり自分に書かせてくれという。

<わたしの まなえは オスヴィアントラで ブキティンギのうまれた。いま 日本語をじょうずに になりたい だから、ときどきガイドをします。それでは 日本語ではなすことができます>

意味はわかる。今度は私が<バーイク>嬢にインドネシア語で、彼が書いた言葉を通訳する。さて、どちらがうまいと彼女に言うと、首をすくめた。

やがて、スターがやってきた。黒い皮のロングドレス。紅は濃いえんじ色だ。長い髪を後ろに束ね、さっそうと、風を切るように、私はジャカルタから来たスターだという傲慢さがそれらしい。怒っているように見えた。事実何かトラブルがあったようで、ホテルの責任者らしい男が、腫れ物に触るように腰を低くしてご機嫌を伺っている。<きっと疲れているのさ>とボーイがささやく。顔をしかめて、背後から舌をだすウェートレス。

やがて、歌い始める。

「ほら、ほら、写真撮らなくっちゃ」<バーイク>嬢が言う。

「威張っていて、感じが悪い」

「でも、有名なのよ」

「もうフィルムの残りが少ないんだ」

「後で一緒に撮ったらいいのに」

「興味ない」

「きれいでしょ」

「そうは思わない。あなたの方がよっぽどきれいだ」

彼女は、お手上げという感じで肩をすくめた。私は本当に怒っていたのだ。

「もう寝るね。明日が早いから」

おやすみと言って手をあげ背を向ける。

「ああ、ミスター・オオサワ、ちょっと待って」

「なに？」

振り向く。彼女が手を差し出す。そうか、私は明日早く出発するし、彼女は今夜はパーティの終わるまで、おそらく2時まで仕事だ。もう会えないから別れの握手か。私も手を差し出し、<元気でね>はどう表現すればよいのだろうと一瞬言葉に詰まると、

「あけましておめでとう」

満面に笑みを浮かべて、晴れ晴れとした表情だった。

スター歌手に腹を立てているうちに、新年だということをつっかり忘れていた。

「おめでとう」

たぶん、私もいい笑みを返すことができただろうと思う。

部屋に戻って時計を見ると、12時15分前だった。そのまま寝込んだので、おそらく私の1996年は夢の中で始まったのだと思う。

そんな風に1995年は終わり、1996年が始まった。

## 6、1月1日 (800kmのドライブ)

ソバを食べたいと思った。朝6時きっかりに出発し、ひと気のない道路を走っているとき、なんだか無性にソバが食べたくなった。そういえば、ブギティンギで草履ステーキを食べた以外はすべてインドネシア料理だった。

今回の旅もほぼ終わったという意識もあったのだろう。あとは寄り道することなく、島の中央を走る道路を南に向かえばいいのだ。地図

によると道路の線も太く問題ないように思われた。順調にいけば5時には帰路の半分強の地点までたどり着け、ストリスノ氏も充分休養をとれるはずだった。

この国では新年はさほど重きを置かれないとはいえ、さすがに朝早くから開いている店はない。やっと見つけた屋台でパンを買い、アクアで流し込んだ。

予想通り、道はいい。9時を過ぎる頃になるとボツリボツリと人を見かけるようになる。

<旅のメモから>

★正月だというのに、普通どおり働いている人がいる。道ばたで家畜用の草を刈り、牛を追う。違うことといえば、バイクでツーリングしているアベックが多いこと。

★スマトラの田舎に住む人たちは、ようするに開拓者なのだ。広い平原あるいは密林に家を立て、木を切り、畑を耕し、牛を追う。束の間の息抜きに20km以上も先の市場に自転車やバイクで買い出しに行く。見渡す限り家一軒ない道を親子でひたすら歩き続ける人たち。<どこへ行くんだ。家がないのに>さすがのスト氏も呆れ顔。

★子供が多い。若者が多い。平原にボツリと一軒だけ建っている家にも幼児が。元気そうだ。不思議に可愛いのだ。可愛いことが不思議に感じられた。

★ライトバンの屋根にベッド用マットレスを4枚重ねて走っている。すごい。

★川で水泳の子供たち。フリチンで十数人。高さ10メートルはあるだろう橋の上からダイビング。写真を撮ろうとすると、ワッとばかりに集まった。もらう当てのない写真にポーズを決める。タバコを吸っている子。<子供がダメじゃないか>と言うと、これみよがしに煙を吐いてみせた。

★埃だらけになった車の窓にスト氏が落書き。  
<Padang → Jakarta>

彼らしくない茶目っ気。約1500kmの

道のりを2日間で駆け抜けようとする彼の意気込みと誇りが感じられる。

◇

異変は、目的地まであと1時間という所で起きた。5時に着いてゆっくり田舎を探索したいと思っていた矢先の出来事だった。

幹線道路の橋が工事のため使えなくなっていたのだ。予めその標識があったわけではない。いきなり、その現場で<この道は使えないから迂回してくれ>だ。

ストリスノ氏は、迂回路まで文句も言わず引き返す。10km。迂回路まで今来た道を10km引き返す。地図を見ると、そこから細く線が引かれた道がある。ざっと計算すると190kmはある。幹線道だと76kmの距離なのだ。

「114km増える迂回路なんて常識外だ。もっと人に聞いた方がいい」

時刻はすでに4時を過ぎている。たとえ、その迂回路がちゃんとした道路でも7時半、悪くすると8時になってしまう。

「いや、もう2人に聞いたから間違いない」ストリスノ氏も譲らない。そう主張されると、私にも言葉のハンディがある。従うしかない。

地図を見ると、迂回路は最初しばらくは大きい集落を通り抜け、その後かなり長い山中を走ることになる。

かなり速いスピードで走るのだが、行けども行けども、山中へ入る気配がない。

ストリスノ氏は、たぶん地図を読めない。地図を見せて、<今、この辺りだ>と説明してもほとんど興味を示さない。

私はたまに出てくる標識でだいたいの検討をつけてストリスノ氏に知らせる。スト氏は、すれ違う車にジャカルタナンバーを見つけるとおそらくこの道で間違いないだろうと判断する。

山中に入る時には、すでにあたりは真っ暗になっていた。ホテルがありそうな大きい町はずでに地図には乗っていない。

<旅のメモから>

★山道を教えてくれた人。<道はどんなだ><バイク(よい)> 地図を見るとかすかに細い道が。たぶんこれだろう。

★どこが<バイク>だ。幅員せいぜい3・4メートルの道全体に20センチの深さはありそうな穴があいている。せいぜい時速5km程度で穴を避けながら進む。これじゃ明日になってしまうと嘆くスト氏。

★そこでこぼこが終わると、遅れを取り戻すべく70kmを越えるスピードで飛ばす。突然、大きな穴。急ブレーキをかけるが間に合わない。車体が軋む。この車を高く売ることによって運転手としてのプライドをかけているスト氏、頭をかかえる。

★車のヘッドライトで見渡すかぎり、日本の山道とほとんど変わらない。しかし、道の奥すべてが密林・ジャングルであることは間違いないだろう。ひょっとしたら、夜に走るよりも昼の方が恐いかもしれない。夜は密林の奥行きが見えない。

★こんな密林の中でエンストしたら、パンクしたら、溝に落ち込んだら。トラの恐怖。大蛇の恐怖。こんな所で外に出るのは絶対いやだ。スト氏に任せるわけにもいかない。彼だって妻子がいる。ならば、車の中で1晩明かすのか。

<オバケが出そうだと>、スト氏。私はそれは恐くない。それどころではない。

★かつて日本軍はこんな密林の中を行進していたのだろうか。義父は侵略戦争とか戦争犯罪という言葉に敏感に反応する。この暗黒の中にと、彼の気持ちがよくわかる。何人もこのおぞましい体験を汚すことはできない。

★日頃、スト氏の運転にクレームをつけることのない私も、スピードを落とすように再三注意。<大丈夫。車は新しいし、私もまだ疲れていない(とはいえ、朝6時に出発してから30分程昼食をとっただけ)><いや、そういうことじゃない。どんな優れた運転手でもいつ事故が起きるかわからない。万が一に起きた時のこと

をまず考えるべきだ>私の口調に苛立ちが。

★<目的地まであと何キロだ>と頻りに聞いてくるようになる。最初は<たぶん、だいたい\*\*キロくらい>と答えていた私も、だんだんぞんざいに<ここがどこかわからないのに、知りようがないじゃないか>

★既に地図からは現在地を読みとることができない。標識がない。おそらく、さっき道を聞いた時、嘘を教えられたのだ。<だから、大きい道を選ぶべきだったんだ>という、<小さい道しかなかったらどうする>彼も負けていない。

★狭い道で二股になった所で、スト氏、<地図をみてくれ>という。

<載ってるわけじゃないか>

男二人険悪な雰囲気夜道を走る。

★20kmに1カ所程度の頻度で、小さな集落がある。地図には載っていない。明かりがある集落もあれば、電気が来ていないのだろうか灯油ランプだけの集落も。高床式の家。西部劇の居酒屋風。人々はその階段に腰掛けたり、道路のアスファルトの切れ目に座り込んだり。若者が圧倒的に多い。

★川でマンディ(水浴)してきたのだろうか、大きなバスタオルで体を包み、密林の中から人が出てくる。こんな暗くなる前に済ましてしまえばいいのに。手桶を小脇に抱え、暗い夜道を歩く女たち。これだけの距離を歩いただけ、また汗が吹き出るだろうに。

★子供が夜道を一人で。恐くないのか。私はダメだ。幽霊が恐い。トラが恐い。ヘビが恐い。

★彼らはたくましい。信じられないほどたくましい。しかし、不幸にはみえない。ヘッドライトに垣間みえる彼らの表情は一樣に穏やかだ。

★しかし、こんな山の中にもポラポラアンテナが。金持ちのステータス。50万ルピア払って、理解できない英語放送を見たがる人がいる。それを押しつけているのは、物質文明生産者だ。それによって、彼らの<なければなりません>生活スタイルは根底から覆えさせられる。使



たくなければ使わなくたっていいんだよ、それは彼らの選択だ、というのは詭弁にすぎない。何時いかなる時も、文明は彼らに強要する。彼らはあらがう術を知らない。物質文明のある生活、ない生活の住み分けは不可能だ。文明は常に加害者だ。彼らは被害者にならないために受け入れ、やがて中毒になる。



当初の目的地 **Lahad** らしい大きな街に辿り着いたのは 10 時を少し過ぎた頃だった。どうやらストリスノ氏のカンは当たっていたようだ。

その街の一番高級なホテルで、一番いい部屋は 1 万 6 千ルピアだった。値段を知らせるとストリスノ氏も同じ所に泊まった。ただし、彼は一番いい部屋ではなく、ランクの落ちる部屋で、6 千ルピアだったそうだ。

部屋は広い。机が付いていて、ベッドはダブルサイズだった。マンディールームもある。しかし、汚い。机の上は埃でざらざらしている。ティッシュで一筋なぞると真っ黒になった。蚊が飛んでいる。持参の蚊取マットを使うべく電源を探したがなかった。蚊取マットはこの国を旅行する限り役に立たない。電源がある高級ホテルは蚊がいないし、蚊がいるところには電源がない。

マンディールームの下側は腐食して穴が開いている。もちろんシャワーはなく、手桶で汲みおきの水を浴びるだけだ。一応下側は仕切があったが、上部は吹き抜けになっていたので背伸びすると外から丸見えだった。

即席ラーメンを作ってもらったら、たぶんお湯をかけたただけだろう、半煮えでシンが残っていた。ビールを 3 本買ってきてもらった。

部屋に電灯はあったが、スイッチは部屋の中にはなかった。外に出て、電気を消し、真っ暗な中でシャツを着替え、ビールを 3 本立て続けに飲んで寝た。シーツに直接体をあてるのがいやだったので、ズボンを履いたままにした。それでも、疲れていたので熟睡できた。

## 7、1月2日 (700kmのドライブ、 27kmのフェリーの旅)

顔を洗いたかったが、洗面器がない。手桶で水を汲み、それを手ですくって顔を濡らした。

ホテルの前の小さな雑貨屋でスプライトと乾パンを買って朝食の代わりにした。乾パンは子供の頃の味と同じだった。たくさん食べたかったが、白っぽい粉が不気味だったので、3個でやめた。

店の女主人は、自分もジャカルタに住んでいたことがあるが、年になったから田舎に戻ってきたとあって、懐かしがった。私のインドネシア語を買いかぶったらしく、早口でまくし立てたので、私にはほとんど理解できなかった。

その街を出て、山道を 2 時間走ると、**Lahad** という標識が目に入った。してみると、タベ泊まった町はどこだろう。私はいまだにわからない。

それからは順調に走った。フェリーの中で、ストリスノ氏、2 度目の余裕か、終わったという安心感か、車の中に閉じこめることもなく、船内をずっと探索していた。船はほとんど揺れることはなかったが、ちょっとした揺れで彼はしきりに恐がった。

タベの恐怖から比べれば天国だと言ったら、いやこっちの方が恐いと譲らない。

夜 10 時、家に着いてメイドのワルティが作ってくれたおにぎりを食べ、ビールを飲んだ。

とりあえず、充実感を伴う疲労感だった。

恐怖の揺れ戻しに震えたのは、ずっと後のことだ。

## アンボンの旅

マルク州の首都。人口約28万人。古くから香料の産地としてよく知られ、新大陸を発見したコロンブスが本当にめざしていた東インド諸島とはこのマルク諸島だったという。ポルトガル・イギリス・オランダ等がスパイスを求めて激しい争奪戦を繰り広げた。これは西洋がアジアを植民地化する前触れにもなったという。イスラム教徒が圧倒的多数を占めるこの国で、アンボン市はクリスチャンの街としても有名。訪れたのはちょうどクリスマス。インドネシアの本物のクリスマスを体験してみたかった。



<I suggest you>とかなんとか、私のインドネシア人パートナーがお説教をたれる。アンボンに行くくらいならトラジャに行くべきである。トラジャには伝統的な建造物と葬儀スタイルがあって・・・云々。しかし、私は儀式を見ることに何の興味もなかったし、何よりもアンボンという地に言い様のないあこがれを感じていた。

たとえば、赴任前のこと。インドネシアに行くよと家内の父親（つまり義父）に告げると、<彼らは怠け者で、嘘つきで・・・>と長々と悪口をいう。よっぽど戦時中にいやなことがあったのだろうとちょっと気が滅入ったのだが、後で聞くと彼はアンボンにいたのだという。

もう一つはアンボンミュージック。ひたすらノーテンキに明るく軽やかで、いいなと思った。南海の楽園というイメージなのだ。そして、一度だけ酒場で会った女性。どこから来たのだと聞くと、アンボンだという。<おー、そこは私のあこがれの地であるのだ。いったい、どんな所なのだ>と聞くと、ただ一言、<ヒッターム（黒い）>。みんな真っ黒なのだという。その単純素朴、自虐的な物言いが記憶に残った。

そんなこんなで、アンボンには南海の楽園、誰も働かず気ままに暮らす別世界。おまけに戦争の傷跡を考えるきっかけになるかもしれない。

アンボンで、私は戦争の傷跡に触れることも、生のアンボンミュージックを聞くこともできなかったけれど、<ひょっとしたら私はいいい人なのではないだろうか>と思わせてくれる人達と出会うことができた。

## 1、<おれは信頼できる>と言った運転手



飛行機が高度を下げ着陸態勢に入ると、椰子とかソテツとかバナナの木を1本1本見分けることができた。<椰子なんかナンボのもんじゃい>という感じに無造作に無秩序に、それもかなり密度濃く生い茂っている。宮崎で見ると、道路脇に等間隔に整然と並べられ、<どうだ、これが南国だい>という押しつけがましきはない。あっけらかんと南国だった。

空港の外では、タクシーの運転手やホテルの客引きが、これまた無秩序に、しかしかなり目をぎらつかせて待っている。預けた荷物はなかったが、手荷物受け渡し所で一服し、呼吸を整えてから外に出た。

「タクシー」

案内の定、数人の男に取り囲まれた。いらぬ、いらぬと言いつつ、とりあえずその輪から強引に抜け出した。ホテルのインフォメーションコーナーを探すつもりだった。ホテルは既に予約していたが、そこに行けば適切なタクシーの乗り方とでもいったことを教えてくれると思ったのだ。

それらしい一角はあったが、誰もいなかった。どうしたものかと思案していると、男が一人寄ってきて、

「おれの車を使ってくれ」と言った。

「タクシーはいらぬ。ホテルの案内を探している」

「そこは、いつも誰もいない。心配なくていい。おれは信頼できる」

信頼できるという言葉があっけらかんと言ってしまう人間を信じていいものだろうか、わたしはしばし悩んでしまった。

「いくらだ」

2万ルピアだといって、ポケットから領収書を出してみせた。何の領収書か分からなかったが、熱心な様子は伝わってきた。

「オー・ケー」と答えると、<ハッホ>と叫び、仲間に手を振って、スキップを踏んだ。

料金メーターはついていない。いわゆる白タクなのだろう。ひどいポンコツ車だった。一応紺系統の色だと思うのだが色が褪せてグレイのようにも見えた。1976年製のカラーラだという。

後ろの座席に乗り込むと、「助手席の方がよく見えるから移ったらどうか」と言った。

「今までどの位走ったんだ」

「バニャック（たくさん）だ」

重ねてキロ数を問うと、「メーターが何回も回転しているから分からない」当惑したように首をひねった。既に数え切れない人の手に渡ってきたのだろう。ドアの取っ手は内から開かなかった。窓を下ろし、外に手を回して扉を開けるのだ。アクセルペダルは既に欠損しているらしく、鉄板と鉄棒で作り替えてあった。

「動くのか」

「あんたの国の車は最高さ」

たしかに日本の車はすばらしいのだろう。中央線のない一般道を、警笛を鳴らしづめにして80kmでとばした。シートベルトを探したが、あるわけもない。助手席に乗ったことを後悔した。

「明日、観光するんだったら、おれを使ってくれないか」

1時間で1万ルピア、1日8時間で7万5千ルピアだという。いったいに、この国の人は5百とか5千とか5の付く金額が好きだ。お金の価値観がその単位で動いていくのだろう。

「ホテルを通したら12万ルピアだ。おれを信用してくれ」

信頼とか信用という言葉に弱い私を見抜いたかのように連発する。結局、彼には3日間世話になることになった。

念のため後でホテルに聞くと12万5千ルピアだった。値切っても7万5千ルピアまでは下がるまいと思った。私はそのことで本当に少しだけ彼を信頼してしまったのだ。



翌日、8時にホテルのフロントで待っていたが彼は現れなかった。時間を確認するのを忘れていたのだが、私は勝手に8時と思いこんで、別にいい仕事でも見つかったに違いないとちょっと気分を害してしまっただが、彼は9時ちょっと前にやはりスキップを踏みながら元気に現れた。

「どこに行きたい？」

「任せるよ」

実際、私はこの島には何の予備知識も持っていなかった。日本語で書かれた観光案内書にはアンボンのことは載っていないし、英語の資料は持っていたのだが、面倒でついつい読まずにやってきたのだ。

結局、彼は海岸を3カ所案内してくれた。<だけだった>というべきかもしれない。

3番目の海が終わった時、「まだ海がある」と彼が言った。

「もう十分だ」

「じゃあ、飛行場に行こう」

「きのう着いた所じゃないか」

他に何か見所はないのかと聞くと、

「ない」とあっけらかんにいう。

<日本軍は><植民地時代のオランダは>  
<アンボンミュージックは><香辛料は>

立て続けに聞くのだが、ことごとく彼は知らなかった。

ある程度予感はしていた。彼が家族のことを話したときなんだか変だなと思ったのだ。

彼は33才、妻29才で看護婦、子供は8才の男の子と3才の女の子。妻の収入20万ルピア、彼は平均10万ルピア。

私は空港からの行き帰りと観光、3日間で11万5千ルピア払っているが、それだけでも彼の月収を越えてしまっている。私は最初月収10万ルピアというのは値段を高くするための<はったり>だと思っていたのだが、たぶん事実だ。彼には観光案内の経験がほとんどないのだと思う。



彼にとってこの島の誇るべき所は、大昔の香辛料でもオランダの名残でもない。今あるがままのこの島が好きなのだと思う。

「お土産屋に連れていってくれ」と言った時のことだ。彼はここぞとばかりに胸を叩いて車に飛び乗った。おそらくバック・マーゲンがもらえる店を知っているのだろうと思っていたら、連れていってくれた所は店といえる代物ではなかった。道路脇に1メートル程の台を置きピーナツ煎餅を数個積み上げているだけだった。

「アンボンのピーナツは最高だ」彼は憶することなくそう言って胸を張った。

この島にお土産になる品がないわけではない。現に私はホテルで聞いて真珠貝の飾り物をかなり大量に買い込んだ。彼は知らなかっただけなのだ。

こんなこともあった。

昼食にいい場所を知っているという。私はまた彼を疑ってしまった。バックマーゲンがもらえる高級レストランだろうと考えたのだが、これまたとんでもない誤解だった。

彼が連れて行ってくれたのは、海岸沿いの屋台だった。屋台とはいっても1畳分程の茅葺きの屋根の下に老婆が一人、香辛料を潰す小さな石臼と数種類の果物を入れた籠があるだけだった。

「どこなんだ」

「ここだ。エナック（おいしい）、マニス（甘い）。」

不意を食らっているうちに、断る機会を逸してしまった。

老婆が石臼に何種類かの香辛料を入れる。透明のビニール袋の中身を一つ一つ確かめながら指先で軽く摘んでパラパラと。丹念にすり下ろした後に果物を切りおとす。果物とはいっても、その多くは見慣れないものだ。固そうで、<甘くジューシー>という果物のイメージからはほど遠い。果物を入れた籠の上には布をか

けている。ハエがつくのを防ぐためだ。1種類で5切れほど、全部で7~8種類は入れたらうか。仕上げはパイナップルだ。唯一果物らしいのがこれだった。

老婆は果物籠の布を持ち上げ、切り忘れた物がないか確認した後、香辛料と果物を丹念に混ぜ合わせ、皿に盛る。山盛りだ。

皿は大丈夫だろうか。盛る直前に布で軽く拭いてはいたが、布自体が危なっかしい。それに、石臼にしてもほとんど無防備だ。ふと見ると、パイナップルの切り口にハエがたかっていた。上にかけてた布がその部分だけ空いていたのだ。ハエだけならまだしも、小さなアリのような虫も進入していた。

しかし食べなければいけない。彼を疑っていたのだから、そのおとしまえは必要だ。

<あと何日ここにいる。今晚一晩泊まって明日はジャカルタ。よしんば、今晚発病したとしても、明日病院に行けるし、肝炎やチフスならもっと先だ>

確かに甘い。しかし固い。なんとか食べられるのはパイナップルとパパイヤだけだった。あとは、ほとんど人参サラダに近かった。

味音痴の私にとって、食べるのが苦痛というのはめったにない経験だった。もし衛生上の心配がなければ、もっと気楽に食べられたのだろうが、一口食べる度に発病の危険が増すのだと考えると、これは苦痛だった。

7分目ほど頑張ったところで、満腹だといって返した。

彼が、どうだというように顔色を伺う。

「エナック」

生まれて初めて<おいしい>という言葉を使った。1000ルピアだった。

◇

彼はよいガイドではなかったが、よいパートナーではあったと思う。

「最初に会った時、あんたは自分のことを信頼できると言っていたが、確かに結局一度も嘘をつかなかった」空港に向かう道すがら私はそ

う言った。

「それは、信頼できたという意味か」

「そうだ」と答えると、

「ありがとう。いいクリスマスだ。金のことだけじゃない」と言った。

空港に着いて、握手を交わす。

「ああ、そうだ。もう一度名前を覚えてくれないか。記憶しておきたいんだ」

「ベンジャだ。トワン・オオサワ、おれは忘れてないぜ」

別れ方は、ハードボイルドだった。

## 2、パサール（市場）の人々

ホテルの窓からパサールが見える。それだけで私はこのホテルが気に入ってしまった。パサールは、外国人に見せる場所ではない。むしろ見せたくない場所に分類されるだろう。庶民が生活のための物資を極限まで安く買ったた場所である。売る方も買う方もよそ行きの顔を作っている余裕はない。そんな場所に外国人相手の高級ホテルを建てるという根性、見上げたものだというべきではないだろうか。

ホテルの部屋に入るなりさっそくお金の整理をした。日本円にしてせいぜい2~3万円だが、ルピアにすると数10枚。それを右のポケット、左のポケット、靴下の中、3カ所に分散して外に出る。

アンボン人に限らず、この国の人めったやたら唾を吐く。痰ではない。白い泡状の唾を口の中でしばし整えてぺっとやる。特に女性が目に付くのだ。口をモグモグさせているから何をしているのかと見ていると、次の瞬間ぺっとやる。イスラムの断食期間中は水はおろか唾を飲み込むのもよしとせず、唾を吐くのだということを読んだことがあるが、今は断食期間中ではないし、ここはクリスチャンの島だ。ホテルからパサールまでほんの十数メートルの距離な

のに、唾を吐く女性を2人も見てしまった。どんな可愛い娘だって、人前で唾をペッとやられたら幻滅する。それに、どうしたことだろう、可愛い子がいない！黒いのだ。ジャカルタで見かけるジャワ人の黒さとは明らかに違う。ジャワ人の場合、1カ月も家に籠もっていれば脱色しそうな気がするのに、この人は、たとえ太陽が無期限ストに入ったとしても金輪際抜けないような種類の黒さだ。鼻も太く横に広がり、髪は縮れている。

<ヒッター> 故郷を捨てジャカルタに出稼ぎに来ていた19才の娘を思いだした。

「あんたはそんなに黒くない」

「親は両方とも真っ黒」

「じゃあ、何故」

「知らないよ」

この国は判りにくいことがたくさんある。



クリスマスを前にした買い出しなのだろうか、パサールは人がひしめいていた。

道路の両側に2階建ての大きなビルが建ち、その間の道路に屋台が軒を連ねている。木箱を1~2個しつらえその上に魚や野菜を並べている者、それさえできないものは両手にウズラの卵や香辛料を載せて人混みの中を縫うように歩き売る。服やサンダル、鶏卵、タバコに花火まで、様々な売り手が値を連呼する。生きたニワトリを逆さ吊りにして抱える者、その1羽1羽の腿を触り肉付き値踏みする買い手。売り手と買い手の人混みの中を、天秤棒に籠をつないだ担ぎ屋が頻りに往来する。買った物を車まで運んだり、あるいは産地からトラック搬送された品物をそれぞれの屋台まで運ぶのだろう。バナナや魚を、見ているだけで切なくなるほど目一杯に2つの籠に詰め込み、天秤棒を軋ませながら運ぶ。大人もいれば、せいぜい中学生程の年齢にしか見えない者もいる。彼らの多くは、壮絶なまでに粗末な身なりだ。肩口が大きく破れ、明らかに長い間洗濯をしていないと分かるほど垢が染み込んでいる。

雨が降ったのだろうか、それとも野菜の腐汁が流れ込んでいるのだろうか、道路のあちこちが濡れて泥状になっている。くさい。海が近いが潮の香ではない。物が腐った臭いだ。

野菜の屋台にカメラを向けると、子供達が寄ってきてポーズを決める。彼らは手に黒いプラスチックの袋を持っている。客が買った品をそれに入れて運ぶのが彼らの仕事だ。彼らに悲壮感はない。半ば楽しんでいるようにも見える。

雑踏の中を歩いても、不思議に危険は感じない。人々の目は一様に険しいが、人の物を狙う目つきではない。ジャカルタの路上では、倦怠感を漂わせた物腰の中で目だけが異様に険しい人々をよく見かけるが、ここにはそれがない。もっと必死で、もっと健気だ。いい風景だと思った。



天秤棒を担ぐ少年

### 3、どろぼうクンと出会ったこと

パサールを抜けて、海岸沿いに30分程歩くと繁華街に出た。その中心にマタハリ（太陽）という名の大きなデパートがあった。そこで、私はスリに出会った。確証はないが、彼は間違いなく私を、というより私の財布を狙っていたと思う。しかし、彼のおかげで私はこの島を好きになったのだ。彼がいい人だったからではない。あまりに間抜けな泥棒君だったから、落ち込みかけていた私の気分がすっかり明るくなったのだ。



マタハリデパートは、1階の半分がスーパー



マーケット、残りの半分と2階・3階が服、玩具、薬、時計、レストラン等のテナントが入っている。

<ケンタッキーフライドチキン>

この国に住むようになって、私の食生活で変わったことといえば、フライドチキンに目がなくなったということだろうか。

おそらくこの国の中産階級以上の人々が好むレストランなのだと思うが、大きい都市ならばどこに行ってもあり、結構客が入っている。わざわざアンボンくんだりまで来てフライドチキンでもないだろうが、ついつい入ってしまった。

通路側に席を取りかぶりついていると、7・8才くらいだろうか、少年が通路側からじっとこちらを見ている。ただの眼差しではない。仕切のガラス窓にべったり顔を押しつけ、ちょっと厚手の唇はさながら生け簀にへばり付いたアワビのよう。間にガラスがあるとはいえ、私から1メートルと離れていない。Tシャツは肩口も裾もぼろぼろに破れ、顔は垢とも泥ともいえない汚れて斑になっている。半ズボンの片側は破れ落ちて尻が丸見えになっていた。私は思わず目を背けてしまった。吐きはしないか心配だったのだ。

少年が何を望んでいるのか私には分からなかった。食べ残しが欲しいというのなら、どういう形で渡すのか。わざわざ外に持って行って渡すにしても、それは他のお客に対するルール違反のような気がする。とうに食欲は失せていた。それを残したまま外に出て少年に付きまといられるのは困る。あっちへ行けと手を振るものはばかられた。<ドツボにはまる>というのはこういうことなのかな、そんなことをぼんやり考えていると、少年の目がフッと横に流れた。見ると、身なりのこざっぱりとした家族連れらしい中年の男がしきりに手招きしている。

<来い>といっても、間はガラスで仕切られているし、この格好でレストランに入ってきたら従業員につまみ出されるのが落ちだろう。少

年自身も当惑していると、今度は入り口をしきりに指さす。そこから入ってこいという。少年は意を決したらしく、あたりを伺いながら戸を開け、素早く男の側に駆けつける。千ルピアを渡した。施しとしては破格の金額だ。少年は金をワシ掴みにすると、素早く外に出て、一目散に駆けていく。少年の後を、さらに2・3人の同年代の少年が付いていった。おこぼれに預かろうという魂胆なのだろう。

◇

中産おじさんの酔狂な（と私には思えた）施しのおかげで、ドツボから這いあがった私は、すくむ足をひきずりながらレストランを出た。

やはりパートナーのいう通りなのかもしれない。場所の選定を間違えたのかもしれない。おネエさんはきれいじゃないし、街もそんな魅力的じゃない。だいたい<戦争の傷跡>とノーテンキなくアンボンミュージック>という相反する目的を重ねて旅をするという根性自体間違っているのだ。すっかり落ち込んでデパートを後にしようとした時、フト、いやなものを見たような。今し方、目があつた青年の目。奇妙に粘っこい目つきだった。私は、ここでは外国人だから、物珍しげな視線を浴びるのは慣れていたが、あの粘っこさは尋常ではない。泥棒の目だ。振り返ってみると、案の定、視線がこちらに向けられたままだ。おまけに、後を付けるべく足を踏み出したところだった。彼も不意をつかれたのだろう、視線をどんな風に流そうか、踏み出した足をどう始末しようか、戸惑っているのがよく分かるのだ。17・8才、Tシャツにジーパン、ツバ付きの帽子を律儀に目深に被っている。その上、可愛い顔をしているのだ。しかし、目つきがいけなかった。凶悪犯のどう猛さはないが、その粘っこい眼差しは決して<外国人と一度お話してみたい>という好奇心ではない。獲物を求める目だった。試しにもう一度歩いてみる。数歩進んで、さり気なく振り返る。彼もさり気なく横を向く。今度は彼の横を通り抜け反対方向へ歩き、また振り返る。な

んと、彼もこちらに向きを変えてつけてくる。

「ちょっと兄さんそれじゃ探偵になれないぜ」などと呟きながら、妙に気分が弾んでくるのだった。あっちへ行ったりこっちへ来たり、気分よく遊んで、造作なくまいた。通路の角でいきなり振り返り、彼がひるんだ隙に一目散にテナントの角から角へ走り抜けると、もう彼はついてこられなかった。

このおおらかさ、ノーテンキ。いいなあ、と思った。

#### 4、売春宿の女達

ベンジャが案内する恐怖のビーチツアー。その2番目の海岸に辿りついた時のことだ。

「ここはどんなところだ」

「岩がある」

見ると、直径5メートル、高さもやはり5メートル程の岩が立っている。たしかに岩には違いないが、何の変哲もない岩だった。わざわざアンボンくんだりまで来て見るほどのものではない。そのまま、次へ行こうとして振り向くと、彼はさっさとバナナの皮に包んだ弁当を取り出して、「ゆっくり見てくれ、おれは失礼して朝飯にするから」と先手をうった。

ゆっくり見ろといわれても何もなかった。父親が子供2人を連れて泳いでいた。それだけだった。仕方がないので、引き潮の岩場の水たまりに顔を出したイソギンチャクを竹の棒でつついたりして遊んでいた。子供の頃、そんな風に遊んだな、と思い出しながら。

「何をしているんだ」朝食を終えたベンジャが言った。

「遊んでいるだけだ」

ちょっと照れてしまった。

「あそこが何だか知っているかい」

海岸の背後の小高い丘に寄宿舎のような建物がある。寄宿舎とすれば1・2階合わせて20部屋ほどだろう。青いペンキが所々はげ落ちている。質素といえばそうだが、この国ではどこ

にでもある安ホテルのようにも見えた。

「なんなんだ」

「売春宿だ」

彼は不意を突くのが好きだ。こちらが無防備に過ぎるのかもしれないが。

「ちょっと見てきてもいいだろうか」

「ティダ・アパ・アパ」

普通の人達が、普通の女の子が洗濯物を干していた。チラリとこちらを見て、胡散臭気に眉をしかめ、視線を戻した。



たぶん、インドネシアを紹介した本の中では既に古典に属するといっているのかもしれないジャカルタ日本人学校の生徒が書いた作文がある。私は既に2種類の本でその作文を目にしたことがある。

<向こうから、かみの毛をぼうぼうにのぼしてぼろぼろの服を着た人が歩いて来ます。私はもう見慣れているから別に何とも思いませんでした。しかし私とすれ違うとき、そのインドネシア人はくしゃみをしました。それだけのことに私ははっとしました。なぜならば、私達と同じくしゃみを、そのインドネシア人がしたことびびっくりしたからです。それに、そんなことを思った私にもびっくりしました> (松村光典、ここはインドネシア)

彼らを見たときこの作文を思い出した。<普通の人じゃないか>と思ったからだ。



3番目の海に向かう車の中で、

「何故もっと近くで見えないんだ」とベンジャが言った。

「あれで十分だ。彼らはいくらなんだ」

「1万ルピアだ」安いだろうと言った。「しかし、あそこに行くのは地元の貧乏人だけだ。観光客はホテルとかディスコとかもっと高級なのを相手にする」

「ホテルやディスコにもいるのか」

「全部だ」

私の泊まっているホテルにもディスコがあ

った。

「さっきの娘たちはアンボン人なのか」

「違う。ほとんどがジャワからの出稼ぎだ」

ジャワからこんな遠くまで春を売するためにやってきた娘たち。ジャワでメイドの口もあるだろうに、あんな粗末な寄宿舎で客を待つ。

ベンジャはそれっきり彼らの話はしなかった。嫌なのではなかったと思う。その話は退屈なだけだったのかもしれない。

いずれにしても、その種のホテルやディスコを紹介しようとしなかったということだけで、また少しベンジャを信頼してしまったのだった。

## 5、私を<パパさん>と呼ぶ陽気な仲間達

若い頃、そう、プロレスラーのデストロイヤーがまだ全盛だった頃、私は、何故か<デストロイヤー>と<ドストエフスキー>をよく混同した。友人と文学論を戦わせている時、ついつい「デストロイヤーの<悪霊>では……」とか言って、ひどく恥ずかしい思いをしたことがある。

こちらに来て、ラマダンの季節になると、私は失語症に陥ってしまう。<断食>をついつい<ダンショク>と言ってしまうからだ。

で、こちらは男色が多いかどうかという話になるのだが、<多い>という説が圧倒的だ。あの髭面で何故にまた、と思ってしまうのだがわからない。

男色ではないらしいのだが、男同士で腕を組む、肩を組む、あるいは手を握って歩く、というのはよく見かける。たまに、指を絡ませるのを見かけるのだが、これはちょっと、寒くなる。しかし、おかしい関係ではないのだという。

私は、アンボンの旅で、随分たくさん男たちに肩を抱かれてしまった。それでも、今、思い出してみると、決していやな思い出になっていないのだから、指を絡ませるのも、ひよっとしたら悪くないのかもしれない。

◇

ベンジャとのあまりにも早く終わったビーチ観光の後、どろぼう君との鬼ごっこで気分をかなりハイにしてホテルに戻った。

なにしろ5時まで続くはずの観光が、鬼ごっこを含めても3時に終わってしまったのだから時間を持て余す。

ホテルのレストランの一角にあるバー・コーナーでビールをオーダーした。<アイヨッ>という感じで冷えたビールが即座に目の前に置かれた。これは高級ホテルの証である。1ランク下がると氷入りのビールになる。もっと下がるとぬるいビールにストローが2本差し込まれてくる。ぬるいビールは許せるがストローは許せない。ストローをはずして飲むのだが、これ、実に即物的な感じでよろしくない。酔えばいいのだらうという、100%情緒欠落なのだ。

いずれにしても、ここのは冷えたビールだ。しかし、うまくない。コクがどうの、キレがどうのと、うるさいことをいうつもりはないが、アルコール分が足りないような気がする。ビンを手を持ち、アルコール度数の表示を探していると、

「ティダ・エナックか（うまくないのか）」

「うん、うまくない。ビール・ビンタンはないのか」

ちゃんとしたビールがそれなのだ。

「ティダ・アダ（ない）」

その頃になると、ウェーター、ウェートレス入り交じって数人が私のそばに集まっていた。午後3時のレストランといえば暇そのもの。物珍しい外国人相手に暇をつぶそうという魂胆がありありだ。それは私にとっても願ったりというところだ。

私はそこで1時間程も長居したのだが、不思議なことに何を話したのかほとんど覚えていない。当時の旅行メモを見ても<忘れた>としか書いていない。このメモはいつも胸のポケットに入れ、話が一段落した時書き込むようにしていたのだ。たしかこのときも部屋に戻って、

すぐ取り出して書き込もうとしたら、まったく思い出せなかった。彼らとの雑談はすこぶる楽しかったのだが、全く記憶から消えている。おそらく、ごく平凡な井戸端会議風な会話だったのでらうと思う。

◇

ふと気がつくと、彼らは私のことをくパパさんと呼んでいた。

こちらの人たちが日本人に対して呼びかける時の言葉は大きく4つに分かれる。一番最初に洗礼を受けるのがくトワンであろう。メイドや運転手など家庭の使用者、それに何故か観光地の土産物屋がこの呼び方を好む。くダンナとでも訳すのだろうか。家庭の使用者から言われるのは既に慣れてしまったが、旅先でこれをやられると他の言葉が頭に入らなくなる。

くだんな・だんな様ご主人>……そうか、おれはくだんな様>なのかとしみじみと考え込んでしまう。

職場で少し親しくなると、くパー・オオサワ>と呼ぶ人がでてくる。Bapak (バパッ) を略した敬称だ。「おれはパーじゃないぞ」などと怒ったりはしない。結構この言葉が好きなのだ。日本風にくおおさわさん>という人もいる。日本に留学したことがある人、あるいは日本系の企業で働いている人に多い。日本食のレストランやバーで働く女性もくさん>だ。私の職場のパートナーは、男性の方はくオオサワさん>と呼び、女性の方はくパー・オオサワ>と呼ぶ。私は、くさん>に対してはくパー>で返し、くパー>に対してはくさん>で返す。相手のスタンスに合わせているのだ。最も多いのがくミスター>だ。ちょっと巻き舌になってくミストル>と聞こえる。ホテルマン等あらゆる外国人を外国人としてとらえる人達がこれを好む。何故か、職場の比較的下にランクされるスタッフ・警備の人たちもこれを好む。私は、あまりこの呼ばれ方が好きでなくて、一度「私は日本人だ、あんたはインドネシア人だ。どちらも英語圏の人間ではない。くさん>かくパー>で呼んでく

れないか」と言ったことがあるが、今は、こだわりはない。

で、くパパさん>という呼び名、くBapak>とくさん>を合わせたものなのだろうが、不思議に心地よい。いかついアンボン顔の男が私の肩に手を置きながら、「ねえ、パパさん」といった感じで話しかけてくると、「うん、なに、なに」といった感じで答えてしまうのだ。

写真を見ると、当時私と井戸端会議に講じた仲間たちは7人、男3人、女4人という組み合わせなのだが、意外と生粋のアンボン人は少なかった。道で見かけたアンボンの人たちと違う顔付きだなと思って聞いてみると、ジャワだったりスマトラだったりする。

「いったい、ここにはアンボン人はいないのか」

「おれだ」と名乗りでた彼は意外とハンサムに見えた。

「ハンサムなんじゃないか？」

「アンボン人にハンサムはいないよ」と口を挟んだのはこれまた数少ないアンボン娘だった。「見てごらんよ。色は黒くて、鼻は大きい。髪は、まるで、ミーゴレン(焼きそば)」

言われてみると、たしかに髪は縮れている。

「パパさん、笑っちゃいけないよ、おれ、本当は悲しいんだ」

ちっとも、悲しそうではなかったが、悲しいと言われると困ってしまう。

「写真を撮ろうか」そう言うと、話に加わっていた者も、半分寝ていた者も、一斉に立ち上がって、く持っているの?>くどこにあるの?>く早く撮ってよ>くおれはパパさんと一緒だ>くわたしは一人で>……。

あれよ、あれよという間もなく、24枚取りフィルム1本を使いきってしまった。

危ういところで頬ずりは避けられたが、異常に顔と顔が接近した写真が、対男3枚、対女1枚、私のアルバムに収まっている。

◇

アンボンのクリスマス・イブは浮かれることもなく、静かに過ぎていく。

パサールは夕方になると、ひとけが途絶え、屋台の多くも閉じられた。おそらく屋台の後始末をする両親を待っているのであろう子供が3人鬼ごっこをしていた。彼らはいい表情をしている。身なりは貧しいがいい表情をしていた。＜いい表情＞という以外、彼らをどう表現すればいいのか、私には分からない。



パサールの子供たち

ホテルのベッドに横たわる。考えるべきことは山ほどもある。ベンジャを何度も疑い、逆に何度も意表を突かれたこと。ジャワから来たという娼婦たちのこと、狙いを外したくどろぼうクン>のこと。彼らはどんなクリスマス・イブを過ごしているのだろうか。

どこからか、花火を打ち上げる音が聞こえる。教会の礼拝を終え、家路につく人々の控えめな話し声。

そして、スマトラから来た女の子。

＜見られる＞ことよりも＜見る＞ことに興味を持つ、ということは年齢の問題なのだろうか、それとも個性の問題なのだろうか。

ウジュンパンダンで見かけた女性に代表されるこの国の女性は、見ることに疲れ、見られることのみに興味を持っているのかもしれない。

い。

それはやむを得ないことなのかもしれない。極端に安い賃金と極く限られた仕事量の狭間で彼らはとうに未来に対する興味を失っている。おそらく、彼らの興味は人と人との関係だけなのだろう。相手が自分をどう見るかということが最大の関心事なのではないか。

だから、少しでも自分に視線を固定する人間がいれば、まるで旧来の友人あるいは恋人でもあるかのような親しみを感じるのかもしれない。見ることよりも見られることにのみ意味を見いだすというのは、まだ若い頃から倦怠を余儀なくされた人間の特徴なのかもしれない。

スマトラの女の子のように見ることに興味を失わない子が増えれば、この国は大きく変わるだろうと思った。いや、それはこの国だけに限ったことではないのかもしれない。

## 7、アンボンで会った日本人

空港の受付カウンター的女性は、いかにも飛行機会社の社員らしく知的で端正な顔をしている。

搭乗券には飛行機の便名しか書いていない。座席番号を聞くと「どこでもどうぞ」と言う。出発時間を聞くと、「スブントール（もうちょっと）」と言う。

もう少しと言われると不安になるが、旅行社から聞かされていた時刻にはまだ1時間以上間がある。「定刻か」と聞くと、「そうだ」というので、空港内を歩いてみることにした。コーヒーと、何故か白木を煎じた肩こりの塗り薬を置いた喫茶室でもないお土産屋でもない不思議なコーナーでコーヒーを飲んだ。若い女性が二人で店番をしていた。

「暇そうだね」

「なんか話して行ってよ」

昨日の井戸端会議で、初対面の人と話すコツは体得している。彼らはよく笑った。やはり暇そうな派出所の警官が顔を出し、「この子たち

はチェーウェなんだ」と言って、下卑た笑いを振りまく。〈チェーウェ〉という言葉は知らなかった。その場で辞書を引くと、〈Girl〉とある。少女あるいは生娘というような意味もあるのだろうか。警官がその種のネタでチェーウェをからかっていいものだろうか。

やはり暇そうな受け付けカウンター嬢も顔を出し、  
「私はチェーウェではない」という。「子供がいるからね」

なんと本人まだ 25 才、すでに離婚しているが、10 才の子供がいるという。この国はめったやたらこういう経歴の人が多く、さほど驚くことではないが、端正な顔立ちとのギャップに私は目を丸くした。



待合室に入ると日本人が搭乗を待っていた。真珠の養殖をしている人で、日本に休暇帰国をすところだという。アンボンからさらに船に乗って小さな島に渡ったところが職場なのだという。

私がジャカルタ暮らしだと聞くと盛んに羨ましがった。食べ物のこと。交通の便のこと。田舎の人間は働かない、謝らない……。

愚痴をこぼしながらも、長い間かかってやつとこちらの人間の心を掴んだという誇りも感じられた。

確かに大変だったろうなと思った。それはよくわかった。彼の愚痴は程度の差こそあれ、ジャカルタでもほとんど同じことではあった。

しかし、今は、とりあえず、信じていたいことがある。

〈アンボンでは、いやな人とは一人も出会わなかった〉